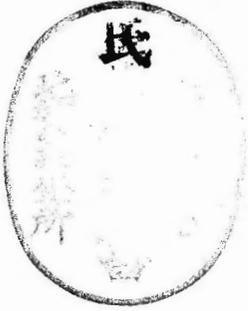


地質調查所報告

第六十七號

金原信泰氏



SEP 18 1925

地質調查所報告第六十七號

大正七年十月

目次

巖手縣下鐵鑛調查報文

一頁

青森縣下北半島鐵鑛調查報文

六三頁

福島縣雙葉郡陶土調查報文

八九頁

巖手縣下鐵鑛調查報文

巖手縣下鐵鑛調査報文

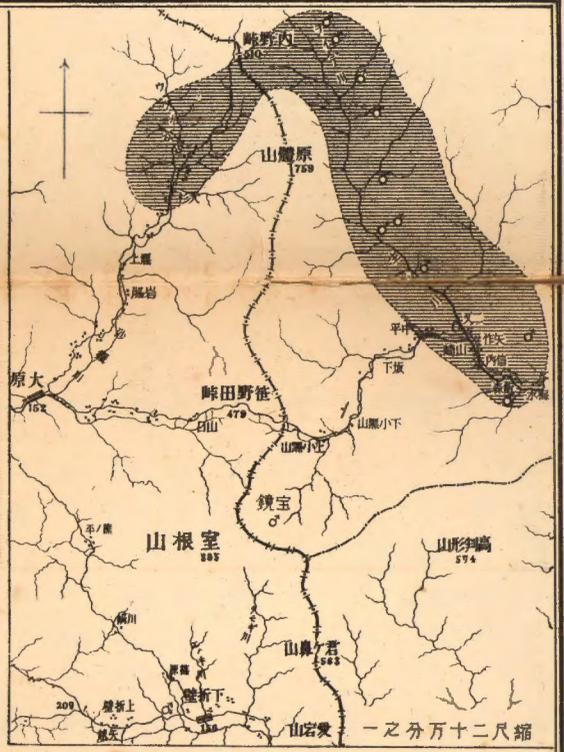
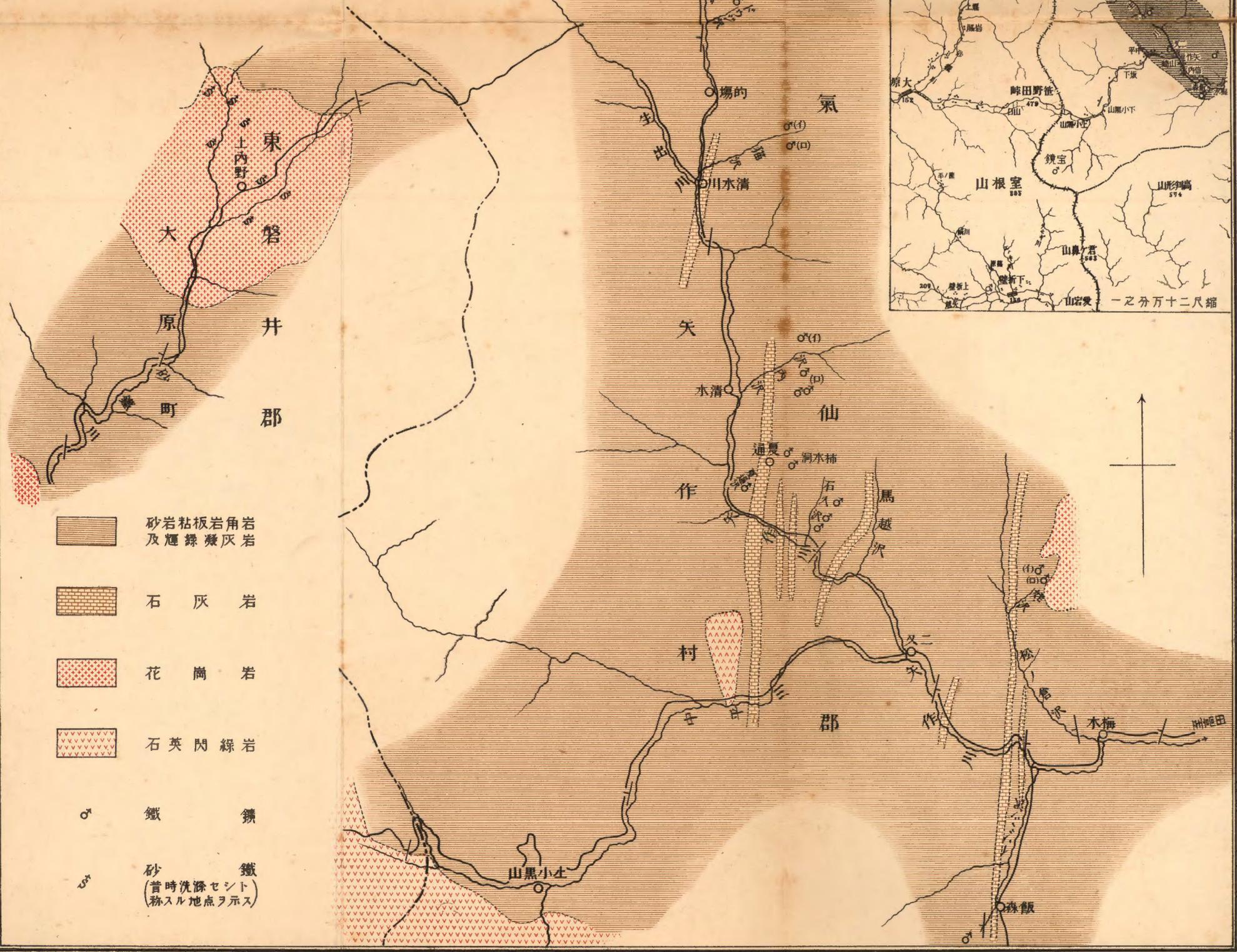
目次

一	氣仙郡矢作村ニ於ケル鐵鑛	一頁
(一)	峠ノ澤區域	四頁
(二)	猫澤區域	九頁
(三)	澤内澤區域	〇頁
(四)	夏通區域	二頁
(五)	石入澤區域	四頁
(六)	松ノ倉澤區域	五頁
(七)	飯森區域	七頁
(八)	寶鏡澤區域	八頁
(九)	鑛量	九頁
二	東磐井郡大原町ニ於ケル砂鐵	二頁

	三	上閉伊郡宮守村ニ於ケル鐵鑛	二四頁
	(一)	塚澤ノ南方路傍ニ於ケル露頭	二五頁
	(二)	塚澤ノ南西山腹ニ於ケル露頭	二七頁
	(三)	塚澤字次野ニ於ケル露頭	二九頁
	(四)	鑛量及品位	三一頁
四		下閉伊郡ニ於ケル鐵鑛	三二頁
甲		船越村ニ於ケル鐵鑛	三二頁
	(イ)	丸森山ノ露頭(其一)	三四頁
	(ロ)	丸森山ノ露頭(其二)	三五頁
	(ハ)	大釜崎ノ露頭	三五頁
	(ニ)	鮎谷ノ露頭	三七頁
	(ホ)	沿革及鑛量	三七頁
乙		豐間根村ニ於ケル硫化鐵鑛	三九頁
丙		重茂村ニ於ケル鐵鑛	四二頁

ルケ於ニ郡井磐東郡仙氣 圖布分鑛鐵

一之分万五尺縮



-  砂岩粘板岩角岩
及輝綠癸灰岩
-  石灰岩
-  花崗岩
-  石英閃綠岩
-  鐵鑛
-  砂鐵
(昔時洗源セシト
稱スル地点ヲ示ス)

	(八)	鑛量及品位……………	五四頁
丁		田老村ニ於ケル鐵鑛……………	五七頁
	(一)	金堀澤ノ露頭……………	五八頁
	(ロ)	砥澤ノ露頭……………	六一頁
	(ハ)	金堀澤及砥澤ノ鑛床……………	六二頁

巖手縣下鐵鑛調査報文

農商務技師 納 富 重 雄

大正六年十月下旬命ニ依リテ巖手縣下ニ出張シ同縣下ニ於ケル鐵鑛ノ調査ニ從事スルコト約四十日、同年十二月中旬其外業ヲ終了セリ、茲ニ調査ノ結果ヲ報告ス

一 氣仙郡矢作村ニ於ケル鐵鑛

位置及交通 矢作^{ヤサキ}ハ廣田灣ノ西岸ニ位スル高田ヨリ一ノ關ニ通スル縣道ニ沿ヘル一邑ニシテ鐵鑛ノ產地トシテ古クヨリ知ラレタル地域ナリトス、矢作、高田間ハ約三里ニシテ矢作川ノ蝕刻セル溪谷稍開ケ一箇處ニ坂路アルモ低卑ニシテ容易ニ車馬ヲ通シ得ヘシ、矢作ヨリ西方一ノ關ニ至ル約十一里ノ間ニハ矢作川ノ分水嶺アリテ山側急斜シ溪間狹隘ニシテ峻坂多ク車馬ノ輓用頗ル困難ナリトス、矢作ヨリ南方氣仙沼ニ至ル約三里半ノ間ニハ里道通スルモ稍急峻ナル坂路アリ、道路

險惡ニシテ車馬ヲ通スルコト容易ナラス、又矢作ヨリ北方約三里ヲ隔ツル世田米ニ至ル間ハ道路稍平坦ニシテ車馬ノ輓用容易ナルモ是ヨリ以北ハ峻峻ナル山岳地ニシテ辛ウシテ人馬ヲ通スルヲ得、之ヲ要スルニ該地方ハ概シテ交通頻繁ナラス

地質　ハ古生代ノ砂岩、粘板岩、角岩及石灰岩ノ互層并ニ是等ニ貫入セル花崗岩、閃綠岩及玢岩等ヨリ成ル、古生層ハ處ニ依リテ著シク變質ス、其一般層向ハ南北ニ近キモ局部ノ變化多ク傾斜一定セス、花崗岩ハ角閃黑雲母花崗岩ニ屬シ細粒乃至粗粒ナリ、其含有スル有色礦物ノ多寡ニヨリテ灰白色乃至黝色ヲ呈ス、之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ主成分ハ石英、正長石、斜長石、角閃石及黑雲母ニシテ副成分ハ磷灰石、磁鐵礦、風信子鑛等ナリ、主成分ノ内斜長石ハ正長石ヨリ遙ニ多量ニシテ岩石ハ閃綠岩質ナリトス、角閃石ノ量ハ一般ニ黑雲母ニ優ル、閃綠岩ハ花崗岩ト同一岩漿ヨリ分化セルモノナルヘク其鑛物成分ハ花崗岩ニ類似ス、玢岩ハ暗綠色ノ地ニ斜長石ノ斑晶散在セルモノナリ、之ヲ顯微鏡下ニ檢ス

ルニ主成分ハ斜長石及角閃石ニシテ副成分ハ磁鐵鑛及石英粒ナリ、是レ蓋シ閃綠岩ノ一異相ナルヘシ

鑛床　ハ概ネ粘板岩中、或ハ砂岩中、或ハ粘板岩ト砂岩トノ間ニ層狀ヲナシテ胚胎シ、獨リ寶鏡澤ト稱スル一溪流ノ源頭附近ニ於ケル鑛床ハ閃綠岩中ニ賦存ス、鑛石ハ粗粒ノ磁鐵鑛ナルモ稍多量ノ小ナル石英粒ト密雜シ處ニヨリ磁力ノ強弱ニ甚タシキ差違アリ、恐ラクハ石英粒ト密雜スルノ故ナラン、夏通澤ト稱スル一溪流ノ南側ニ露ハル、鑛床ハ之ト趣ヲ異ニシ鑛石中ニ角岩、砂岩及粘板岩ノ礫ヲ含有シ諸種ノ岩礫ハ恰モ磁鐵鑛ニヨリテ膠結セラレタルカ如キ觀アリ

沿革　本地方ニ埋藏セラル、鐵鑛ノ發見時代ハ明カナラス、聞ク所ニ依レバ今ヨリ四五十年前夏通附近ニ於テ一時鐵鑛ヲ採掘セント企テタルモノアリト云フ、其後之カ採掘ニ著手スルモノナク、四五年前ニ至リ釜石鑛山ニテ之カ採掘ニ從事シ、本地方ニテ最モ北方ニ位スル峠ノ澤區域ヨリ百五六十噸ノ鑛石ヲ搬出セシモ道路險惡ナルカ爲ニ運賃

高ク且ツ鑛石ノ含鐵品位比較的良好ナラサリシヲ以テ遂ニ之カ採掘ヲ中止セリ

鐵鑛ノ分布 本地方ニ於ケル鐵鑛ノ分布區域ヲ細別スレハ左ノ如シ

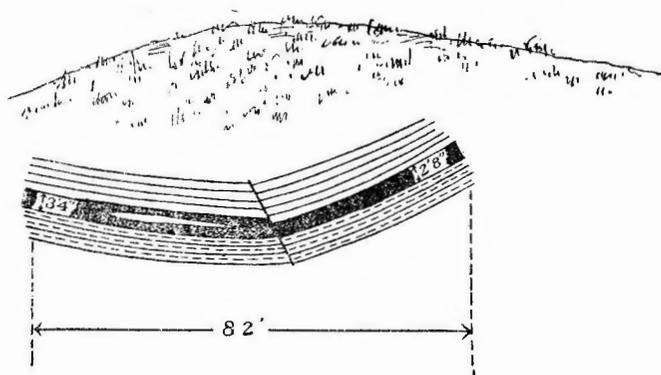
- (一) 峠ノ澤區域
- (二) 猫澤區域
- (三) 澤内澤區域
- (四) 夏通ナツガヨヒ區域
- (五) 石入澤區域
- (六) 松ノ倉澤區域
- (七) 飯森イモウ區域
- (八) 寶鏡ハツキヨウ澤ザツ區域

(一) 峠ノ澤區域

峠ノ澤ハ生出オビデ川ノ支流ニシテ生出川ト矢作川トノ合流地タルニ又ヨリ北方ニ距ル約二里ニ位スル的場ニ於テ生出川ニ注ク其流域ニ五箇

圖 二 第

頭露鑛鐵ルケ於ニ澤〔ジウド〕



處ニ鐵鑛ノ露頭アリ
 (イ)「ドウジ」澤ノ露頭ハ三十度内外ニ
 傾斜セル山側ニアリテ溪流ハ其南麓
 ヲ流レ、露頭ハ溪流面ヨリ高キコト約
 百尺ナルヘシ、鑛床ハ千枚岩質粘板岩
 及砂岩ノ間ニ賦存シ其附近ニ玢岩露
 出スルモ變質作用明カナラス、露頭ハ
 走向ニ沿ヒ八十二尺マテ追跡スルヲ
 得ヘク附近ノ地形及地質ニ徵スルニ
 地下ニテハ尙ホ連續スルモノトス、露
 頭ノ東端ニテハ走向北四十度東、傾斜
 北西四十度内外ナルニ、西端ニテハ走
 向北三十五度東、傾斜南東三十五度ナ
 リ、其露出状態ハ第二圖ニ示スカ如ク

中央部ニ於テ斷層ニヨリテ斷タル、モ落差極メテ小ナリ

鑛床ハ其走向延長八十二尺ニシテ東端ニテハ厚サ二尺八寸ナリ、西端

ニテハ厚サ三尺四寸ナルモ中ニ厚サ四五寸ノ母岩ヲ挾有スルヲ以テ

厚サ平均二尺八寸ナリトス、茲ニ鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ二百尺マテ採

掘シ得ヘキモノトシテ鑛量ヲ概算スレハ六千餘噸ナリトス

本地方ニ分布スル磁鐵鑛ハ稍多量ノ石英粒ヲ含有シ加フルニ後ニ表示スルカ如ク本所

分析係ニテ分析セシ結果ニ依レハ「チタニウム」ヲ含有スルニヨリ茲ニ假リニ比重ヲ五。

○トシテ計算セリ、以下亦之ニ準ス

(ロ)「マガリ」澤ノ露頭 ハ同澤ノ源頭附近ニアリテ其東側ニ位ス、鑛床ハ

淡綠灰色ノ千枚岩質粘板岩中ニ層狀ヲ成シテ胚胎シ其上下兩盤ハ判

然ス、其走向南北ニシテ東方六十度ニ傾斜ス、露頭ハ同澤ノ澤口ヨリ高

キコト約八十尺ニ位シ其走向ニ沿ヘル延長二十五尺露ハル、モ地表

下ニテハ尙ホ連續スルモノ、如シ、厚サハ北端ニテハ二尺五寸ナルモ

南端ニテハ二尺三寸トナレリ

鑛床ノ走向延長ハ二十五尺ニシテ厚サ平均二尺四寸ナリ、鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ二百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ鑛量ヲ計算スレハ千餘噸ナリトス

(ハ)ヒバコヤ澤ノ露頭ハ三箇處ニアリ、假リニ(甲)、(乙)、(丙)ト稱ス

(甲)ハ河床附近ニアリ、鑛床ハ直チニ表土ニヨリテ被覆セラル、下盤ハ細粒ノ灰色砂岩ニシテ判然スルモ少シク鑛染セラル、而シテ其表土中ニハ多量ノ粘板岩碎片ヲ含有スルヲ以テ恐ラクハ鑛床ノ上盤ハ粘板岩ナリシナルヘク浸蝕作用ノ爲メ斯ク除去セラレタルナラン、鑛床ハ北十度西ニ走リ西南西四十度ニ傾斜ス、其走向ニ沿ヒ二十五尺露ハレ、厚サ平均三尺二寸内外ナリ

茲ニ安全ヲ計リ其傾斜ニ沿ヒ深サ百五十尺マテ採掘シ得ルモノトシテ鑛量ヲ計算スレハ千餘噸ナリトス

(乙)ハ(甲)ノ北方約百五十米ノ處ニアリテ(甲)ヨリ高キコト約六七十尺ナルヘシ、鑛床ノ上盤ハ多少千枚岩質トナレル粘板岩ニシテ下盤ハ細粒

ノ砂岩ナリトス、其走向北二十度西、傾斜西南西六十五度ナリ、露頭ノ走向延長ハ二十尺ニシテ厚サ平均五尺ナリ

安全ヲ計リ鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ二百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ二千餘噸ナリトス

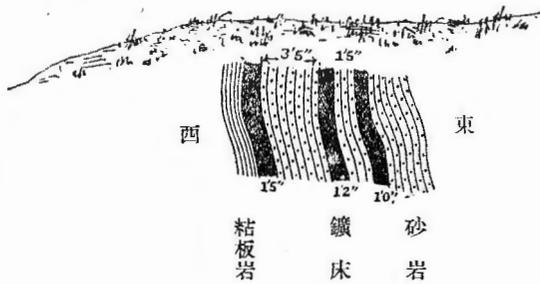
(甲)及(乙)兩鑛床ハ其地形及地質ニ徴スルニ恐ラクハ一個ノ連続セル鑛床ナルヘク、其成生後ノ剝削作用ニヨリテ一部ハ除去セラレ、一部ハ厚キ表土ニ被覆セラレ現ニ見ルカ如ク二箇處ニ露ハレタルモノナルヘシ

(丙)ハ(乙)ノ南東約百米ノ處ニアリテ是ヨリ二百尺内外高シ、玆ニハ僅カニ三箇處ニ於テ少シク表土ヲ除去シ其露頭ヲ檢セシニ過キササルヲ以テ其走向延長及厚サ明カナラス、現露頭ニテハ走向延長約六十尺ニシテ厚サ二尺内外ナルヘク、走向約南北ニシテ殆ント直立スルモノ、如シ、鑛床ノ走向延長六十尺、厚サ二尺、深サ二百尺マテヲ採掘シ得ルモノトシテ鑛量ヲ計算スレハ三千餘噸ナリトス

猫澤ハ前記ノ的場ニ南隣スル清水川ニ於テ生出川ニ合流スル一溪流ナリ、其源頭附近ニ於テ溪流ノ南北兩側ニ鐵鑛ノ露頭アリ、其間約百五十米ヲ隔ツ

圖 三 第

頭露鑛鐵ルケ於ニ側北ノ澤猫



リ深サ百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量千餘噸ナリト

(イ) 溪流ノ北側ニ於ケル露頭 鑛床ハ三鑛帶ヨリ成リ走向ニ沿ヒ約二十二尺露出ス、其上盤ハ甚タシク粗粒ニシテ一部蠻岩狀ヲ呈スル砂岩、下盤ハ多少凝灰質ヲ帶ヘル淡綠灰色ノ粘板岩ナリトシ、鑛床間ハ淡灰色粗粒ノ砂岩ナリトス、其走向北十五度東ニシテ東南東七十度ニ急斜ス、鑛床ノ露頭ハ第三圖ニ示スカ如クニシテ厚サ平均一尺二寸ナリトス、露頭ハ溪流面ヨリ約百尺高キヲ以テ安全ヲ計

ス

(ロ) 溪流ノ南側ニ於ケル露頭 (イ)ニ比スレハ更ニ二三十尺高キ處ニ露ハル、其下盤ハ(イ)ニ於ケルト同様ナル粘板岩ニシテ上盤ハ(イ)ニ比スレハ稍細粒ノ砂岩ナリトス、其走向北十五度西ニシテ傾斜東北東五十五度ナリ、蓋シ(イ)ト同一ノ鑛床ニ屬スルナラン、鑛床ハ走向ニ沿ヒ十七尺露ハレ厚サ五尺内外ナリトス

安全ヲ計リ深サ百五十尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量千餘噸ナリトス

(三) 澤内澤區域

澤内澤ハ二又ト的場トノ中間ニ位スル清水ニ於テ生出川ニ合流スル一支流ナリ、其溪谷ニ沿ヒ清水ヨリ東方ニ溯ルコト約十町ニシテ溪流ノ南北兩側ニ鐵鑛ノ露頭アリ、鑛床ハ共ニ稍粗粒ノ砂岩中ニ胚胎シ層狀ヲナセルモ局部ニ甚タシク撓曲セル處アリ

(イ) 溪流ノ南側ニ於ケル露頭ハ三箇處ニアリ、共ニ同一鑛床ニ屬スヘ

キモノニシテ其走向ニ沿ヒ約四百五十尺マテハ追跡スルヲ得ヘク、附近ノ地形及地質ニ徴スルニ地表下ニ於テハ尙ホ連續スルモノトス、其北端ニテハ走向北十五度西、傾斜西南西七十度ナルモ南端ニテハ走向北五十度東、傾斜北西四十五度トナリ漸次ニ彎曲セリ、鑛床ハ猫澤ノ北側ニ露ハル、モノト同シク三鑛帶ヨリ成ル、其間ノ砂岩ノ厚サハ二尺乃至十五尺ニシテ各鑛帶ノ厚サハ八尺乃至十尺ナリトス

鑛床ノ露頭ハ溪流面ヨリ百五六十尺高キ處ニアリ、鑛床ノ厚サヲ平均九尺トシ、深サ百五十尺マテ探掘シ得ルモノトシテ鑛量ヲ概算スレハ二十五萬六千餘噸ナリトス

(ロ) 溪流ノ北側ニ於ケル露頭ハ一箇處ニアルノミ、現露頭ハ走向ニ沿ヒ二十尺露ハル、モ地表下ニテハ尙ホ連續スルモノ、如シ、鑛床ハ三鑛帶ヨリ成リ、各鑛帶ノ厚サハ一尺乃至一尺七寸ニシテ其間ニ挾在スル砂岩ノ厚サハ二尺乃至三尺五寸ナリトス、露頭ハイニ比スレハ約五十尺高キ處ニアリ

鑛床ノ厚サハ平均一尺四寸ナリ、鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ二百尺マテヲ
採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量二千餘噸ナリトス

(四) 夏通區域

夏通ハ前記清水ノ南東約十町ノ地ニ位スル一小部落ナリ、本區域内ニ
於ケル鐵鑛ノ露頭ハ夏通澤ノ南岸及柿ノ木洞ノ源頭ノ二箇處ニアリ
(イ)夏通澤ノ南岸ニ於ケル露頭ハ其西方ヲ流ル、生出川ノ水面ヨリ
高キコト二百五六十尺ナルヘシ、鑛床ハ砂岩中ニ胚胎シ、北五十度東ニ
走リ南東七十度ニ傾斜シ、其北東部ハ約北西ニ走レル斷層ニヨリテ斷
タル、鑛床ノ厚サハ約七尺アリテ走向ニ沿ヒ約百八十尺マテ追跡スル
ヲ得ルモ尙ホ南西ニ連續スルモノ、如シ
鑛石ノ蠻岩狀ヲ呈スルコトハ既記ノ如シ、而シテ其中ニ含有セラる、
礫ノ大サハ胡桃大ノモノヲ普通トシ、稀ニ小ナルハ豌豆大ニシテ大ナ
ルハ略拳大ニ達スルモノアリ、又一部分ニテハ豌豆大ノ岩礫ノ多キ部
分ト磁鐵鑛ノ多キ部分トニテ帶狀構造ヲ呈スル處アリ

鑛床ノ露頭ハ夏通澤ヨリ六七十尺高キ處ニアリテ生出川ニ比スレハ二百五六十尺高ク、安全ヲ計リ深サ二百尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量三萬五千餘噸ナリトス

(ロ) 柿ノ木洞ニ於ケル露頭 (イ) 北東約五百米ニ位シ是ヨリ三百尺内外高カルヘシ、鑛床ノ上盤ハ暗灰色ノ粘板岩ニシテ下盤ハ細粒ノ灰色砂岩ナリ、地層ハ澤内澤ニ於ケルヨリ甚タシク撓曲シ層向一定セス、露頭ハ四箇處ニ開掘セラレ其間ハ表土ニヨリテ被覆セラル、モ蓋シ同一鑛床ニ屬スルモノナルヘシ、現露頭ノ北西端ニテハ層向北四十度西、傾斜南西六十度ニシテ厚サ二尺五六寸ナルモ其少シク東方ニテハ層向北七十五度西、傾斜南々西五十度内外ニ變シ、南東端ニテハ層向南北乃至北十五度西、傾斜西方三十度乃至四十度、厚サ三尺三四寸トナレリ、現露頭ノ厚サハ平均三尺ニシテ北東端ヨリ南東端マテハ約三百尺ナルモ鑛床ハ地表下ニテハ尙ホ北西及南東ニ連續スルモノ、如シ

現露頭ハ南東端ニテ傾斜ニ沿ヒ約三百尺開掘セラレ尙ホ下底ニ連續

スルカ如キモ安全ヲ計リ深サ三百尺マテヲ採掘シ得ルモノトシ概算
スレハ鑛量約三萬八千噸ナリトス

(五) 石入澤區域

石入澤ハ夏通ヲ南東ニ距ル十町ノ地ニ於テ生出川ノ下流矢作川ニ合
流スル一小溪流ナリ、其南側ニ鐵鑛ノ露頭アリテ砂岩中ニ胚胎シ、北三
十度乃至四十度東ニ走リ北西七八十度ニ急斜ス、其上盤ヲ成セル砂岩
ハ著シク粗粒ニシテ處ニヨリテハ全ク蠻岩ニ移化ス、蠻岩ノ礫ハ多ク
ハ角岩ニシテ其他少量ノ輝綠凝灰岩、粘板岩及砂岩アリ、礫ノ大サハ碗
豆大乃至胡桃大ヲ普通トシ、稀ニ拳大ニ達スルモノアリ、大正六年十二
月巡回當時ニ踏査セル露頭ハ其延長約千四百尺ニシテ厚サハ概シテ
三尺内外ナリトス、其南西端ハ矢作川ノ河床ヨリ約二百尺高ク石入澤
ノ源頭ノ最モ高キ處ハ現露頭ノ南西端ノ地並ヨリ約百七十米高カル
ヘシ、露頭ノ北東端ハ南西端ヨリ高キコト七八十米ニシテ尙ホ北東ニ
向テ連續スルモノ、如シ

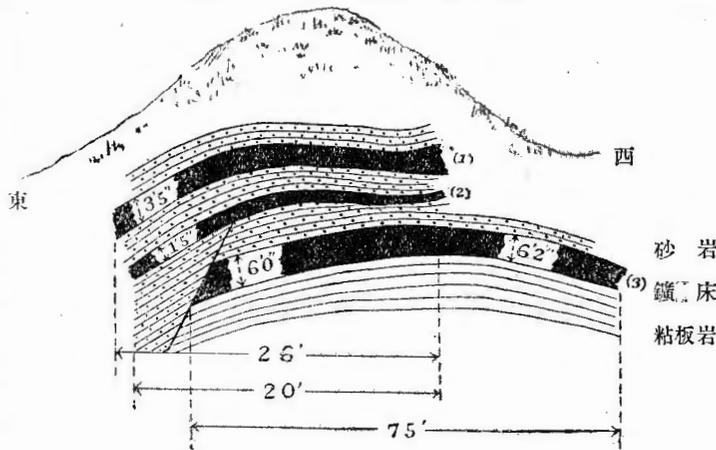
鑛床ノ露頭ノ最モ高キ處ハ矢作川ノ水面ヨリ高キコト約二百二三十米ニシテ該露頭ハ石入澤源頭ノ山脊ヲ横斷シテ其北東側ニ達ス、茲ニ矢作川ノ河床面マテヲ採掘シ得ルモノトシ概算スルニ鑛量三十二萬三千餘噸ナリトス

(六) 松ノ倉澤區域

松ノ倉澤ハ略南流シテ矢作村字梅木ニ於テ矢作川ニ合流ス、梅木ヨリ同澤ヲ溯ルコト約十町ニシテ東方ヨリ來レル姥ノ澤ト稱スル一溪流アリ、其源頭附近ニ於テ溪流ノ南北兩側ニ鐵鑛ノ露頭アリ、露頭ノ南及東ニハ之ニ近接シテ花崗岩露出シ古生層ハ多少變質セリ、鑛床ハ古生層中ニ層狀ヲ成シテ胚胎シ、其下盤ハ稍千枚岩質ヲ帶ヘル粘板岩ニシテ上盤ハ粗粒ノ灰色砂岩ナリトス、鑛床ノ層向ハ溪流ノ南北ニ於テ異ナリ、南側ニ於テハ北四十度乃至六十度東ニシテ南東三十五度乃至六十度ニ傾斜シ、北側ニテハ走向北三十度西、傾斜北東三十度内外トナリ、恰モ別個ノ鑛床ニ屬スルカ如キモ同一ノ鑛床ナルヘク其走向及傾斜

圖 四 第

頭露鑛鐵ルケ於ニ側南ノ澤ノ姥



ノ斯ク變化セルハ其附近ニ花崗岩ノ貫入セルニ因ルモノナルヘシ

(イ) 溪流ノ南側ニ於ケル露頭ハ其直下ヲ流ル、姥ノ澤ノ水面ヨリ高キコト約三十尺ニアリ、鑛床ハ三鑛帶ヨリ成リ、各鑛帶間ハ厚サ一尺五寸乃至四尺ノ粗粒ノ砂岩ナリトス、露頭ノ一方ハ斷層ニヨリ切斷セラレ又各鑛帶ハ多少撓曲ス、其狀態ハ第四圖ニ示スカ如シ

三鑛帶ヲ上方ヨリ下方ニ向ヒ假リニ(1)、(2)、(3)ト稱ス、(2)ハ最モ菲薄ナルヲ以テ鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ百尺マテ、其他ハ百五十尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量一萬一千餘噸ナ

リトス

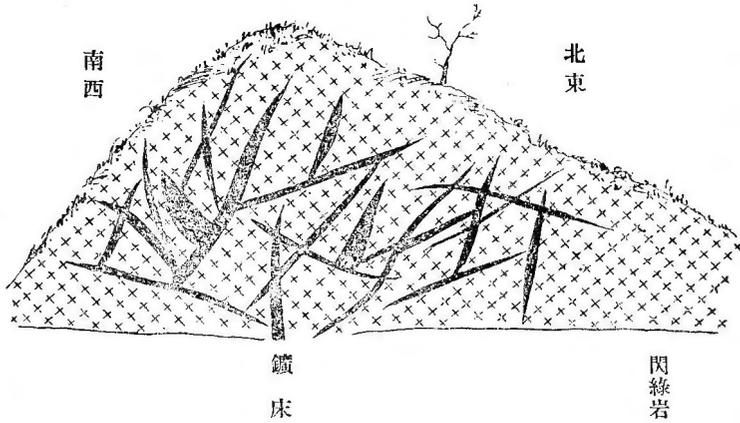
(ロ) 溪流ノ北側ニ於ケル露頭　ハイノ北方約五十米ニ位シ
(イ) ヨリ三四
十尺高キ處ニアリ、鑛床ハ一鑛帶ヨリ成リ、現露頭ハ走向ニ沿ヒ約七十
尺露ハル、モ地表下ニテハ尙ホ連續スルモノ、如シ、厚サハ平均二尺
五寸ナリトス

鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ二百尺マテヲ採掘シ得ルモノトシテ計算スレ
ハ鑛量四千餘噸ナリトス

(七) 飯森區域

矢作村字飯森ハ梅木ノ南方約半里ニアリテ氣仙沼ニ通スル村道ニ沿
ヘル一小部落ナリ、鐵鑛ノ露頭ハ飯森ノ部落ヨリ「イソツミ」澤ト稱スル
一小溪流ヲ西方ニ溯ルコト四町内外ノ處ニアリテ飯森ノ部落ヨリ百
二三十尺高カルヘシ、鑛床ノ上盤ハ粗粒ニシテ淡灰色ノ砂岩、下盤ハ稍
千枚岩質ノ粘板岩ナリトス、鑛床ハ北十度東ニ走リ、西北西七十度内外
ニ傾斜シ、其走向延長ハ露頭ノ開掘充分ナラサルヲ以テ明カナラサル

第五圖
寶鏡ニ於ケル鐵鑛露頭



モ現露頭ハ約五十尺アリテ其厚サ平均二尺五六寸ナルヘシ
鑛床ノ傾斜ニ沿ヒ深サ百五十尺マテ
採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛
量二千餘噸ナリトス

(八) 寶鏡澤區域

寶鏡澤ハ氣仙郡矢作村、東磐井郡大原
町及折壁村ヲ劃スル室根山ノ北東側
ニ發源シ北東流シテ矢作村字小黑山
ニ至リ矢作川ニ合流ス、其源頭附近ニ
於テ溪流ノ南北兩側ニ鐵鑛ノ露頭アリ、
鑛床ハ閃綠岩中ニ胚胎スルモ規則
正シキ鑛脈ヲ形成セスシテ極メテ不
規則ニシテ膨縮甚タシ、即チ第五圖ニ

示スカ如ク恰モ母岩ノ裂罅面ニ沿ヒ鑛液ノ浸潤シテ成リシモノ、如シ、鑛石ハ磁鐵鑛ニシテ局部ニハ品位良好ナルトコロアルモ概シテ貧劣ニシテ且ツ鑛量少ナク現狀ニ於テハ稼行ニ堪ヘサルモノトス

此外矢作村ニ於テ生出川ノ西側及飯森ノ北西方ニ鐵鑛ヲ産スト云ヒ其附近ニ鑛塊轉在ス、其大サハ概シテ大ナラスシテ徑二三寸ヲ普通トシ、稀ニ一尺ニ近キモノアリト云ヒ、將來探鑛ヲ要スル地域ナルヘシ

(九) 鑛量

矢作村ニ於ケル鐵鑛量ヲ表示セハ左ノ如シ

區域別 推定鑛量(噸)

(一)	峠ノ澤	一五、〇〇〇
(二)	猫澤	二、〇〇〇
(三)	澤内澤	二五八、〇〇〇
(四)	夏通	七三、〇〇〇
(五)	石入澤	三二三、〇〇〇

(六) 松ノ倉澤
 (七) 飯森

計

一五、〇〇〇
 二、〇〇〇
 六八八、〇〇〇

是等鑛量中假ニ其三分ノ二ヲ探掘ジ得ルモノトセハ鑛量四十萬噸以上ナリ、然レトモ今回踏査セル露頭ノ延長ハ何レモ未タ其開掘充分ナラサルヲ以テ將來各鑛床ノ走向ニ沿ヒテ探鑛セハ鑛量著シク増加スルモノト信ス

既記ノ諸露頭ニ於テ採集セル鐵鑛ニ就キ本所分析係ニテ分析セル結果左表ノ如シ(百分中)

區域名	露頭所在地	鐵	滿	俺	チタニウム	硅	酸	磷	硫	黃	水	分
(一) 峠ノ澤	「ドウジ」澤	四七・八二	一・五一	八・七七	一三・四六	痕	跡	痕	跡	一・一八		
同	「マガリ」澤	四七・二〇	〇・九〇	八・八五	一三・一三	同		〇・〇一五		〇・七四		
同	「ヒバコヤ」澤	四六・三七	〇・八〇	八・五八	一七・三四	同		痕	跡	〇・八二		

(七)	飯 森	「イツツミ」澤	三八・六四	〇・一九	七・九九	二一・一九	同	現存セス	一・九七
	同	同 北側	五一・五〇	〇・六〇	六・六六	一三・二八	現存セス	〇・〇一一	〇・八二
(六)	松ノ倉澤	姥ノ澤南側	五〇・七八	〇・九二	五・三七	一七・四八	〇・二〇〇	痕 跡	〇・六七
(五)	石入澤	石入澤南側	五〇・一七	〇・五一	八・七四	三・七七	同	同	
	同	柿ノ木洞	五二・四四	〇・二二	九・六四	三・〇〇	同	現存セス	〇・六二
(四)	夏 通	夏 通 澤	三五・六〇	一・〇〇	四・八三	二一・〇〇	同	同	〇・八七
(三)	澤内澤	溪流ノ南側	五二・九九	一・一五	一一・四九	三・六二	痕 跡	同	〇・三七
	同	同 北側	四三・七六	二・〇三	八・二二	二二・〇〇	同	同	〇・六五
(二)	猫 澤	溪流ノ南側	四三・二一	一・八四	八・六九	一一・七一	現存セス	同	〇・九七

二 東磐井郡大原町ニ於ケル砂鐵(第一圖)

大原町ヨリ北東ニ向ヒ砂鐵川ノ溪谷ヲ溯ルコト約二里ニシテ上内野

ニ至ル、今ヨリ五六十年前マテハ上内野附近ニ於テハ七箇處ニテ該地方ヲ構成セル花崗岩ノ霉爛部ヲ洗滌シテ砂鐵ヲ採取シ、之ヲ大原町ヲ東方ニ距ル約一里ノ地ニ位スル山口及更ニ其東方一里ノ地ニ位スル氣仙郡矢作村字小黑山ニ搬出シ、同地ニ於テ薪炭ヲ燃料トシテ鐵ヲ製鍊セリト云フ、嘗テ砂鐵ヲ採取セリト稱スル處ノ表土ヲ取リテ洗滌セシニ原量ノ約二十「パーセント」ノ砂鐵ヲ得タリ、蓋シ該處ハ其含有量他ノ區域ヨリ多量ナル處ナリシナラン、又砂鐵川ノ河床ニ堆積セル砂ヲ洗滌シテ原量ノ約十「パーセント」ノ砂鐵ヲ得タリ、然レトモ其本源ハ恐ラクハ風化霉爛セル花崗岩中ノ暗黑色ナル分結圍塊ニ含有セラル、磁鐵鑛ナルヘク、其含有量ハ局部ニ甚タシキ差違アリ、其量ハ之ヲ推定スルヲ得サルモ蓋シ尠少ナラサルヘシ

往時砂鐵ヲ採取セリト稱スル處ニテ採取セル砂鐵ニ就キ本所分析係ニテ分析セル結果左ノ如シ(百分中)

鐵	滿	俺	砒	酸	燐	硫	黃	水	分
三九・七九	〇・三〇	三二・一五	〇・〇四三	現存セス	一・三五				

上内野ノ東方ニ聳立シ氣仙郡ト東磐井郡トノ一部ヲ割スル海拔七百
 五十九米ノ原臺山^{ハラダイ}ノ西側ニ於テ鐵鑛ノ露頭アリト稱スルモ其所在明
 カナラスシテ之ヲ踏查スルコト能ハサリシヲ遺憾トス
 折壁村字下折壁ヲ西方ニ距ル約一里ノ地ニ七日市ト稱スル一小部落
 アリ、其北方ノ山腹ニ鐵鑛ノ露頭ト稱スルモノハ露頭ニアラスシテ徑
 一尺以上ニ達スル磁鐵鑛ノ多量ニ轉在スルモノナリ、其附近ノ地質ハ
 古生代ノ砂岩、粘板岩及輝綠凝灰岩ノ互層並ニ是等ニ貫入セル花崗岩
 ナリ、古生層ハ北東乃至北々東ニ走リ北西ニ急斜スルモノ、如シ、此附
 近ニ舊坑アリ、現時全ク廢頽ス、土地ノ古老ニ就キテ聞クニ之ニ關シテ
 ハ何等ノ口碑ナシト云フ、而シテ其附近ノ廢石中ニハ磁鐵鑛ノ外黃銅
 鑛、孔雀石、黃鐵鑛等アリ、舊坑ヲ開掘シテ探鑛スルノ要ナシトセス

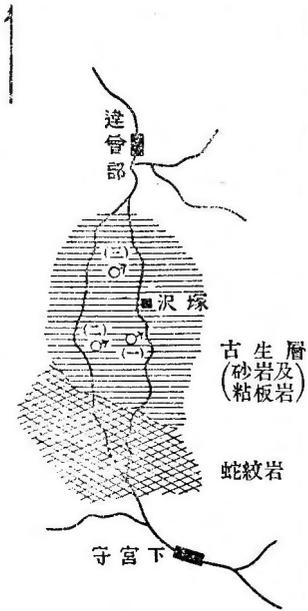
是ヨリ北方ニ距ル約六七町ニシテ東山鑛山アリ、銅鑛探掘ノ目的ヲ以テ目下黒雲母花崗岩中ニ鑛入ヲ開口シ探鑛中ニシテ未タ鑛床ニ會セス、其南方ノ丘陵上ニ露出スル露頭ハ約北東ニ走リテ直立スルモノ、如ク鑛床ハ多少變質セラレタル輝綠凝灰岩中ニ胚胎ス、露頭ノ走向ニ沿ヘル延長ハ明カナラサルモ幅ハ一尺内外ナリトス、露頭部ニ於テ黃銅鑛、黃鐵鑛、孔雀石、磁鐵鑛、輝石、電氣石ノ密雜セルヲ見ルモ含銅及含鐵品位ハ良好ナラス、蓋シ鐵鑛トシテハ探掘ノ價値ナキモノトス

三 上閉伊郡宮守村ニ於ケル鐵鑛(第六圖參照)

岩手輕便鐵道(花卷、仙人峠間)ノ一驛タル宮守驛ヲ北方ニ距ル約一里ニシテ宮守村大字塚澤ト稱スル村落アリ、其地内ニ於テ三箇處ニ鐵鑛ヲ産ス、(一)ハ塚澤ノ南方約六町ニシテ路傍ニアリ、(二)ハ塚澤ノ南西ニ當リテ山腹ニアリ、其間十二三町ヲ隔ツ、(三)ハ塚澤字次野ト稱スル一小部落ヲ北西ニ距ル約五町ノ山腹ニアリ

聞ク所ニ據レハ(一)及(二)ノ發見時代ハ今ヨリ凡ソ三十年前ニシテ(三)ハ

第六圖
 宮守村塚澤地内ニ於ケル鐵鑛分佈圖



大正六年三四月ノ交發見
 セラレタリト云フ
 地勢ハ概シテ急峻ナラス
 シテ交通便ナリトス
 地質ハ古生代ノ砂岩及粘
 板岩ノ互層ヨリ成リ、概シ

テ北西ニ走リ南西ニ傾斜スルモノ、如シ、砂岩ハ概ネ淡灰色ヲ呈シ細
 粒乃至粗粒ニシテ局部ニ蠻岩狀ヲ呈スルコトアリ、粘板岩ハ帶綠淡灰
 色、暗灰色或ハ黑色ヲ呈シ概シテ剝離シ易シ
 鑛床ハ砂岩中ニ、或ハ粘板岩中ニ、或ハ砂岩ト粘板岩トノ間ニ胚胎シ層
 狀ヲ成ス、鑛石ハ粗粒ノ磁鐵鑛ニシテ氣仙郡矢作村地方ニ産スルモノ
 ニ類似ス

(一) 塚澤ノ南方路傍ニ於ケル露頭

道路ノ北側ニ露出スル鑛床ハ砂岩ト粘板岩トノ間ニ胚胎シ、其走向約

南北、傾斜西方八十五度内外ナリトス、鑛床ノ下盤ハ淡灰色細粒ノ砂岩ナルモ其附近ニ火成岩ノ貫入セシナルヘク、其一部ハ「ホルンフェルス」ニ變セリ、上盤ハ黑色或ハ暗灰色ノ粘板岩ナリ、鑛床ノ厚サハ路傍ニテハ十尺ニシテ夫レヨリ走向ニ沿ヒ約四十尺北方ニ至レハ一尺二三寸ニ縮迫シ、上下兩盤ニ多少鑛染セリ

本鑛床ハ大正六年四月以來露天掘リニテ開掘セラレ、走向ニ沿ヒ約四十尺、深サ十四五尺採掘セラレ、採掘鑛石ハ其傍ノ小屋ニ之ヲ藏セリ該露天掘リニテ採掘セル鑛量ハ四百餘噸ナリトス

本鑛床ノ鑛石及鑛床賦存ノ狀態ハ既記ノ如ク氣仙郡矢作村地方ニ産スルモノニ類似ス、而シテ本所分析係ニテ分析セシ結果ニヨレハ本鑛床中ニ「チタニウム」ヲ含有ス、依テ前例ニ倣ヒテ比重ヲ五・〇トセリ、以下之ニ準ス

本鑛床ハ其走向ニ沿ヘル延長大ナラサルモ下底ニ向テハ連續スルモノトス、現時既ニ道路ト同高ニ至ルマテ掘下セルヲ以テ安全ヲ計リ是ヨリ下方百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量三千餘噸ナ

リトス

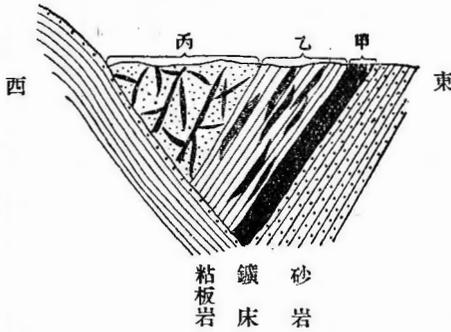
(二) 塚澤ノ南西山腹ニ於ケル露頭

本鑛床ノ發見時代ハ今ヨリ約三十年前ナリト稱スレトモ其露頭ヲ開掘セシハ大正六年四月以後ナリト云フ、現時開掘セラレタル露頭四箇處アリ、假リニ之ヲ(イ、ロ、ハ)及(ニ)ト稱ス

露頭(イ)ハ道路ヨリ四百四五十尺高キ處ニアリ、鑛床ハ砂岩中ニ賦存シテ北四十度西ニ走リ南西六十五度内外ニ傾斜ス、其下盤ハ暗灰色粗粒ニシテ一部蠻岩狀ヲ呈スルモ上盤ハ稍細粒ナリトス、鑛床ノ厚サハ約十尺ニシテ走向ニ沿ヒ延長十五尺露ハル、モ尙ホ連續スヘシ、本鑛床ノ下底ハ是ヨリ約五十尺下方ニテ表土ヲ除去セル處ニ僅カニ露ハル

本鑛床ハ現時ノ露頭ニテハ走向ニ沿ヒ延長十五尺ニ過キサルモ其地形及地質ニ據レハ三四十尺ハ連續スルモノト推定ス、依テ走向延長三十尺トシ、深サ二百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量八千

圖 七 第
頭露鑛鐵ルケ於ニ(ハ)



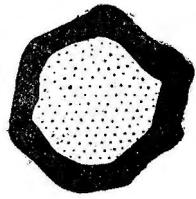
餘噸ナリトス
露頭(ロ)ハ(イ)ノ南方約三十尺ニアリテ三十尺内外其上層ニ位セリ、鑛
床ハ(イ)ト同シク砂岩中ニ賦存シ、其走向北三十五度西、傾斜南西七十度
内外ナルカ如ク、露頭ノ開掘未タ充分ナラサルヲ以テ鑛床ノ厚サ約五
尺走向ニ沿ヒ十尺内外露ハル、ニ過キス、而シテ其露頭ハ其下方ノ溪
谷ヨリ高キコト二百七八十尺ナルヘシ

本鑛床ハ現時走向ニ沿ヒ十尺内外露ハル
、モ尙ホ二十尺内外ハ連續スルモノト信
ス、依テ走向延長ヲ三十尺トシ、深サ百五十
尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ
鑛量三千餘噸ナリトス
露頭(ハ)ハ(ロ)ノ南方約百五十米ノ處ニア
リテ殆ントト同高ニアリ、本鑛床賦存ノ
状態ハ第七圖ニ示スカ如ク(甲)砂岩ト粘板

岩トノ間ニ胚胎スルモノ、(乙)粘板岩中ニ小ニシテ薄キ扁桃狀ヲナセルモノ及(丙)砂岩ノ節理ニ沿ヒテ浸潤セルモノトアリ(第八圖)其走向北二十度乃至三十度西ニシテ南西四十度

第八圖

第七ノ染
圖一ノ岩
片ノ状態
ヲ示ス
ヨリ
砂其



鐵鑛浸潤状態



砂岩

板岩ノ厚サ約三尺アリ、(丙)ハ採掘ニ堪ヘス

斷タル、鑛床ノ厚サハ(甲)ハ一尺内外、(乙)ハ厚キ所ニテ二寸五分以下ニシテ粘

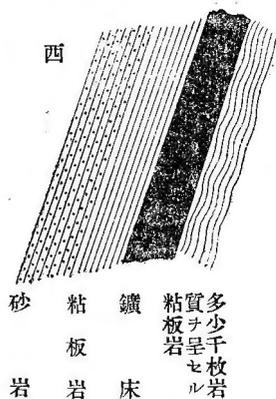
現時開掘セラレタル處ハ走向ニ沿ヒ約三十尺、深サ十四五尺ナリトス、然レトモ現時ノ露頭ノ下底ニ於テ斷層ニ斷タル、ヲ以テ其埋沒セル鑛量ハ之ヲ測定シ難シ

露頭(ニ)ハ(ハ)ノ南東約三百米ニシテ其間ニ傾斜比較的緩ナル一溪谷ヲ隔ツ、本露頭ハ鑛床ト稱スヘキモノニアラスシテ(ハ)ノ(丙)ニ酷似シ到底採掘ニ堪フルモノニアラス

(三) 塚澤字次野ニ於ケル露頭

大正六年四月以降開掘セラレタリト稱スル露頭ハ三箇處アリ、假リニ
 (イ、ロ)及(ハ)ト稱ス、鑛床ハ粘板岩中ニ賦存シ、其走向北二十度西、傾斜西南
 西六十度ナリトス、其下盤ヲ成セル粘板岩ハ暗灰色ニシテ多少千枚岩
 質ナルモ上盤ハ黑色ニシテ千枚岩

第九圖
 次野地内(イ)ニ於テ
 於ケル鐵鑛露頭



質ヲ呈セス、鑛床ハ(イ)ニ於テハ厚サ
 二尺六寸アリ(第九圖參照)(ロ)ハ(イ)ヲ北々
 西ニ距ル約百十米ニアリテ低卑ナ
 ル分水嶺ノ反對側ニアリ、(ロ)ニ於テ
 ハ鑛床ノ厚サ一尺六七寸ニ縮迫セ

リ、鑛床ハ(イ)及(ロ)ノ間整然トシテ連續ス

露頭(イ)及(ロ)ハ殆ント同高ニアリテ其下方ノ溪谷ヨリ高キコト百四五
 十尺ナリトス、依テ深サ百五十尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレ

ハ鑛量一萬六千餘噸ナリトス

露頭(ハ)ト稱スルモノハ(ロ)ノ北々西三百四五十米ノ處ニアリテ其間ニ

溪谷ヲ擁シ相對ス、鑛床ハ(イ)及(ロ)ト同シク粘板岩中ニ胚胎シ、北十五度西ニ走リ西南西五十度内外ニ傾斜ス、鑛床ノ厚サハ三尺内外ナルモ開掘未タ充分ナラサルヲ以テ走向ニ沿ヘル延長明カナラス、其地形及地質ニ據レハ走向ニ沿ヒ三四十尺ハ連續セルコト、信ス、依テ走向ニ沿ヘル延長ヲ二十尺トシ、深サ百五十尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量一千餘噸ナリトス

(四) 鑛量及品位

宮守村大字塚澤ニ於ケル全鑛量ヲ表示セハ左ノ如シ

鐵鑛分布區域

推定鑛量(噸)

(一)	塚澤ノ南方ニ於ケルモノ	三、〇〇〇
(二)	塚澤ノ南西ニ於ケルモノ	一、〇〇〇
(三)	塚澤字次野ニ於ケルモノ	一七、〇〇〇

計

三一、〇〇〇

既記ノ諸露頭ニ於テ採集セル鐵鑛ニ就キ本所分析係ニテ分析セル結

果左ノ如シ

露頭所在地	鐵	滿	「チタニウム」	硅	磷	硫	水
塚澤ノ南方路傍	四六・八六	〇・九〇	一〇・二〇	一四・九二	現存セス	〇・〇二五	一・二二
塚澤ノ南西山腹	五〇・〇五	〇・九四	八・四三	一一・〇八	痕跡	現存セス	〇・七〇
塚澤字次野	四八・八二	〇・八五	八・二九	一五・五六	同	痕跡	〇・九二

本區域ハ交通便ナルニ比シ探鑛未タ普カラス、將來探鑛スヘキ區域ナリトス、就中次野ニ於ケル(ロ)及(ハ)ノ兩者ハ相連續シテ同一鑛床ニ屬スルモノナリヤ將タ各別個ノ鑛床ニ屬スルモノナリヤハ更ニ探鑛スルノ値アリ

四 下閉伊郡ニ於ケル鐵鑛

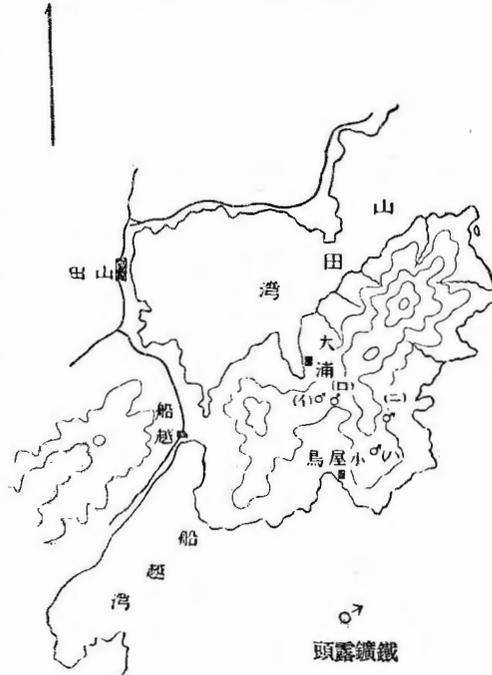
甲 船越村ニ於ケル鐵鑛 (第十圖 參照)

山田灣ノ南岸ニ大浦ト稱スル一小漁村アリ、山田ヨリ陸路約三里ニシ

第十圖

船越村ニ於ケル鐵鑛露頭分布圖

縮尺二十萬分之一



鐵鑛露頭

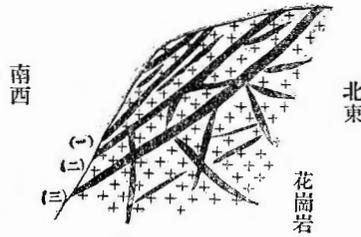
テ達スヘク其間道路險
 惡ナリ、灣内波靜ナレハ
 山田ヨリ大浦ニ至ルニ
 ハ海路ヲ採ルヲ便ナリ
 トス、鐵鑛ノ露頭ハ民家
 ノ南東ニ四箇處アリ、即
 チ左ノ如シ

- (イ) 丸森山ノ露頭
- (ハ) 大釜崎ノ露頭
- (ニ) 鮎谷ノ露頭

地質ハ古生代ノ粘板岩及砂岩ノ互層并ニ是等ニ貫入セル花崗岩ナリ、
 古生層ハ著シク剝削セラレ僅カニ小區域ニ殘存シ花崗岩ハ廣域ヲ領
 ス、花崗岩ハ角閃黑雲母花崗岩ニ屬シ概シテ粗粒ナリ、之ヲ顯微鏡下ニ
 檢スルニ主成分ハ石英、正長石、斜長石、角閃石及黑雲母ニシテ副成分ト

第十圖

丸森山麓ニ於ケル鐵鑛露頭



シテ磁鐵鑛、風信子鑛、燐灰石等アリ
鑛床ニハ花崗岩中ニ胚胎スルモノト、花崗岩ト粘板岩トノ接觸部ニ胚
胎スルモノトアリ、鑛石ハ磁鐵鑛ニシテ(ロ)ニ於テハ極メテ少量ノ黃鐵

鑛ヲ含有ス

(イ) 丸森山ノ露頭(其二)

鑛床ノ露頭ハ丸森山ノ西麓ニアリテ第十
一圖ニ示スカ如ク靈爛セル花崗岩中ニ極
メテ不規則ニ走レル細脈ナリ、其中(一)、(二)及
(三)ノ部分最モ大ニシテ略相平行シテ約北
々東ニ走り西北西ニ急斜ス

脈幅

露頭ノ延長

(一)(二)(三)

六寸
七寸
一尺

二十二尺
二十六尺
三十尺

脈幅細小ニシテ鑛量少ナク稼行ニ堪ヘス
其他細脈數多アルモ品位良好ナラス

(ロ) 丸森山ノ露頭(其二)

鑛床ノ露頭ハ丸森山ノ南西腹ニアリテ(イ)ヲ南東ニ距ル約八百米ニ位
シ(イ)ヨリ三四十尺高く、又南麓ヲ流ル、丸森澤ノ河床ヨリ約百尺高シ、
鑛床ハ花崗岩中ニ脈狀ヲ成ス、其附近ニ鑛石並ニ古生代ノ粘板岩及砂
岩ノ岩片ノ表土ト共ニ散在スルニ徴スレハ本鑛床ハ花崗岩ト古生層
トノ接觸部ニ胚胎セシモ古生層ハ全ク削剝セラレシモノナラン、鑛床
ノ走向ハ北六十五度東、傾斜北西六十度ニシテ走向延長六十五尺、幅平
均六尺アリ、鑛石ハ磁鐵鑛ニシテ少量ノ黃鐵鑛ヲ含有シ品位良好ナラ
ス

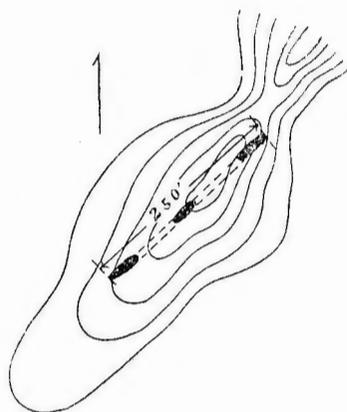
本露頭ハ海拔高距約二百米ノ處ニアリ、深サ二百尺マテ採掘シ得ルモ
ノトシテ計算スレハ鑛量約一萬二千噸ナリトス

(ハ) 大釜崎ノ露頭

大浦ト低卑ナル分水嶺ヲ隔テ其南方ニ小屋鳥ト稱スル一小漁村アリ、村落ノ東方ニ突出セルヲ大釜崎ト稱ス、其北方山頂附近ニ三露頭アリ、鑛床ハ花崗岩中ニ胚胎スル磁鐵鑛脈ナリ、其附近ニ著シク黑雲母ヲ含

第二十圖

大釜崎ニ於ケル鐵鑛露頭



有セル粘板岩ノ岩片及砂岩ノ岩片散在スルニ徴スレハ古生層ハ花崗岩ニヨリテ變質セラレタルカ如キモ其後浸蝕セラレテ現時全ク削剝セラレタルモノナラン

本鑛床ハ其走向東北東、傾斜北々西六十度乃至七十度ニシテ第十二圖ニ示スカ如ク表土ニ蔽ハレテ三箇處ニ露ハル、モ明カニ一鑛床ナルヘク走向延長二百十五尺アリ、脈幅ハ露頭ノ北東端ニテハ約二尺ナルモ南西端ニテハ四尺ニ肥大ス、恐ラクハ漸次肥大セルモノナルヘシ本露頭ハ海拔高距二百四十五米ノ處ニアルモノト推定ス、依テ深サ二

百尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量約二萬噸ナリトス

(ニ) 鮎谷ノ露頭

大釜崎ノ露頭ヨリ北東ニ約百五十米下リシ處ニ鐵鑛ノ露頭アリ、即チ溪流ノ南岸ニ花崗岩中ニ胚胎スル磁鐵鑛床ニシテ幅二十尺、長サ約八十尺アルモ鑛石ノ品位極メテ貧劣ニシテ稼行ニ堪フルモノニアラス、然レトモ該露頭ノ上方ニ幾多ノ磁鐵鑛ノ小塊散在スルニ徴スレハ是ヨリ上方ニ向テ探鑛スルノ要アリトス

此外小屋島ノ東方ノ一小溪流ノ中流ニ徑約一尺ノ磁鐵鑛ノ一塊ヲ發見セシモ遂ニ其露頭ヲ發見スルコト能ハサリシヲ遺憾トス、想フニ小屋島村落ノ東方ニハ尙ホ埋沒セル鑛床アルヘク探鑛ヲ要スル地域ナリトス

(ホ) 沿革及鑛量

沿革 露頭(イ)及(ロ)ハ今ヨリ約二十年前發見セラレ、七八年前丹下某之カ探掘ニ從事セシモ一箇月ヲ經スシテ中止セリト云フ、大釜崎及鮎谷

ノ露頭ハ今ヨリ六七年前ノ發見ニ係リ、横山久太郎一時露頭ヨリ採掘ニ著手セシモ幾何ナラスシテ中止シ、其後之カ採掘ニ從事スルモノナシト云フ

船越村ニ於ケル全鑛量ヲ表示セハ左ノ如シ

露頭所在地 推定鑛量(噸)

丸森山ノ露頭(其二) 一二、〇〇〇

大釜崎ノ露頭 二〇、〇〇〇

計 三二、〇〇〇

鑛石ノ品位良好ナラサルカ故ニ假リニ前記鑛量ノ三分ノ二ヲ採掘シ得ルモノトセハ鑛量二萬噸内外ヲ得ヘシ

既記ノ諸露頭ニ於テ採集セル鐵鑛ニ就キ本所分析係ニテ分析セル結果左ノ如シ(百分中)

露頭所在地	鐵	滿	俺	砒	酸	燐	硫	黃	水	分
-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

丸 森 山	五四・五四	〇・八六	一四・一九	〇・〇一	〇・三四三	〇・二九
大 釜 崎	四八・四四	痕 跡	二五・三二	痕 跡	〇・〇三四	〇・七二
鮭 谷	三九・六六	二・一六	一七・三二	現存セス	現存セス	〇・四八

本區域ニ於ケル調査ハ未タ普カラス、既知ノ鑛量ハ寡少ナレトモ精査探鑛ヲ施行スルニ於テハ更ニ新ニ鑛床ヲ發見スルコトアルヘク注意スヘキ地域ナリトス

乙 豊間根村ニ於ケル硫化鐵鑛

豊間根村ハ宮古ノ南方約四里ニアリテ重茂村ノ西方ニ位シ其間ニハ約南北ニ連互セル十二神山ノ山脊聳立シテ分水嶺ヲ形成ス
 豊間根村字新田ヲ通スル田名部川ノ一支流ニ坂本澤アリ、其源ヲ十二神山ノ西麓ニ發シテ約西流シ新田ニ於テ本流ニ會ス、新田ヨリ坂本澤ニ沿ヒテ同溪谷ヲ溯ルコト約二十五町ニシテ南方ヨリ來レル一溪流アリ、下夏井澤ト稱ス、下夏井澤ヲ溯ルコト約三町ニシテ花崗岩中ニ胚

胎セル硫化鐵鑛脈アリ、其走向北十五度東、傾斜西北西七十五度内外ニシテ脈幅二尺アリ、主トシテ黃鐵鑛ヨリ成リ、之ニ少量ノ磁硫鐵鑛ヲ隨伴シ、稍多量ノ石英ト密雜シ品位頗ル貧劣ニシテ稼行ニ堪ヘス、其南方約三十米ノ處ニ一鑛脈アリ、其走向北三十度西、傾斜北東八十度ニシテ脈幅一尺五寸アルモ前者ト同シク稼行ニ堪ヘス

土地ノ古老ニ就キテ聞クニ該露頭ハ萬延元年六月ノ大洪水後露出スルニ至リシモノナリト云フ

其他此種ノ黃鐵鑛脈二三アルモ前記ノモスト同様ニシテ何レモ鑛石ノ品位貧劣ニシテ稼行ニ堪フルモノニアラス

丙 重茂村ニ於ケル鐵鑛(第十三圖 參照)

重茂ハ宮古町ヲ南東ニ距ル約二里半ノ地ニアリ、其東海岸ハ稍灣形ヲ成セルモ水淺キト海岸附近ニ暗礁多キトニヨリ大船ノ碇泊ニ便ナラス、陸路ハ急坂多ク山田ニ通スル郡道アリト雖モ道路險惡ニシテ車馬ヲ通セス、交通不便ナリトス

地質ハ古生代ノ砂岩、粘板岩及角岩ノ互層並ニ是等ニ迭入セル花崗岩及石英斑岩ヨリ成ル、花崗岩ハ概ネ粗粒ニシテ黒雲母花崗岩ニ屬シ最モ廣域ニ露出シ、石英斑岩之ニ亞キ、古生層ハ處々ニ小區域ニ露出ス、是レ蓋シ古生層ノ大部分ハ浸蝕セラレ其一部ノ殘存セルモノナルヘシ、而シテ其岩石ハ火成岩ノ爲ニ甚タシク變質セラレテ「ホルンフルス」ニ變セル處多ク其層向及傾斜共ニ一定セスシテ激變ス、重茂澤ニテ採集シタル粗粒ノ黒雲母花崗岩ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ主成分ハ石英、正長石、斜長石及黒雲母ニシテ副成分トシテ磁鐵鑛、風信子鑛等アリ、重茂川ノ上流ノモノニハ極メテ少量ノ角閃石ヲ含有ス、下見澤ニテ採集セル石英斑岩ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ岩石ハ主トシテ石英及長石ヨリ成リ之ニ少量ノ黒雲母ヲ含有シ、副成分トシテ磁鐵鑛、風信子鑛、燐灰石等アリ

鑛床ハ花崗岩中ニ、或ハ花崗岩ト角岩トノ接觸部ニ、或ハ角岩中ニ、或ハ角岩又ハ砂岩ト石英斑岩トノ接觸部ニ、或ハ粘板岩中ニ胚胎ス、鑛石ハ

多ク雲母鐵鑛ナルモ十二神ニテハ磁鐵鑛、竈場澤ノ富鑛部ニテハ磁鐵鑛及雲母鐵鑛(兩者ハ互ニ密雜ス)又「ヨナ」澤ニテハ黃鐵鑛ノミヲ産ス、鑛石ノ品位ハ肉眼的ニハ「タルガ」澤ノ雲母鐵鑛ヲ最モ良好ト重茂村ニ於シ其他ハ概シテ良好ナラスケル鐵鑛ノ分布ハ左ノ如シ

(一) 重茂澤流域

(イ) 水車ノ澤ノ露頭

(ロ) 大林ノ澤ノ露頭

(ハ) 「ツボ」松澤ノ露頭

(ニ) 「タルガ」澤ノ露頭

(二) 下見澤流域

長洞澤ノ露頭

(三) 重茂川流域

朴ノ木澤ノ露頭

(四) 十二神山區域

十二神ノ露頭

(五) 「ヨナ」澤流域

(六) 竈場澤流域

(七) 其他ノ區域

(一) 重茂澤流域

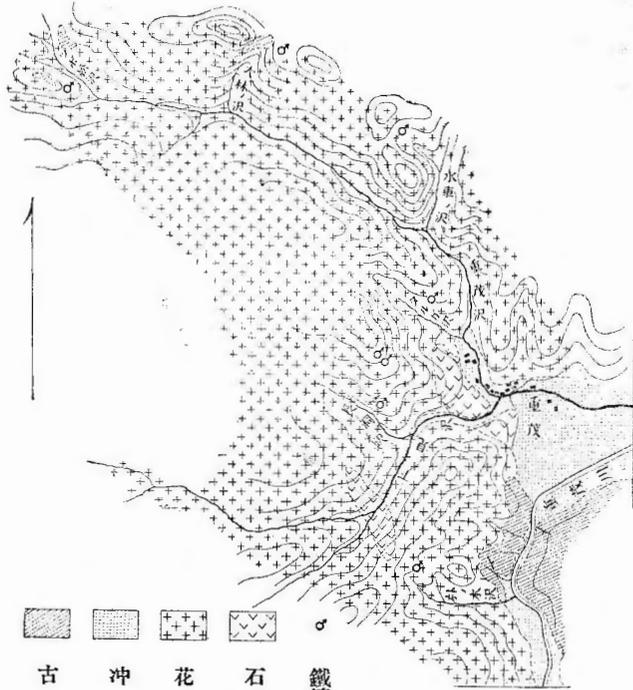
(イ) 水車ノ澤ノ露頭

水車ノ澤ハ重茂澤ノ一支流ニシテ南流シテ本流ニ合ス、鑛床ノ露頭ハ該溪流ノ源頭ニアリテ重茂部落ノアル平地ヨリ高キコト百四五十尺ナルヘシ

鑛床ハ花崗岩中ニ胚胎スル鑛脈ニシテ其走向北七十五度東、傾斜北々西六十五度内外ナリトス、露頭ハ脈幅平均二尺八寸、走向ニ沿ヒ延長十尺露ハル、ニ過キサルモ其地形及地質ニ據レハ尙ホ十尺内外ハ連續セルモノト信ス

第三十圖
重茂附近地質圖

縮尺二萬分之一



- 
古生層
- 
沖積層
- 
花崗岩
- 
石英斑岩
- 
鐵鑛ノ露頭

テ計算スレハ鑛量約千噸ナリトス
(ロ) 大林ノ澤ノ露頭

花崗岩ハ粗粒ノ黒雲母花崗岩ニシテ甚タシク風化霏爛シ露頭附近ニテハ殆ント新鮮ナル所ナシ、鑛床ノ走向延長ヲ十五尺トシ、深サ百五十尺マテ探掘シ得ルモノトシ

水車ノ澤ヲ西ニ距ル約百米ニシテ南流セル一溪流アリ、大林ノ澤ト稱ス、其源頭ニ鐵鑛ノ露頭アリ、鑛床ハ粗粒ノ甚タシク霉爛セル黒雲母花崗岩中ニ胚胎セル鑛脈ニシテ約東西ニ走リ北方八十度内外ニ傾斜シ、走向ニ沿ヒ二十尺露ハレ、其幅平均一尺八寸アリ、該露頭ハ其直下ノ溪流面ヨリ高キコト百尺内外ナリトス
本鑛床ノ深サ百尺マテ採掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量五百餘噸ナリトス

(ハ) 「ツボ」松澤ノ露頭

重茂澤ノ上流ニシテ重茂ヨリ津輕石村(宮古町ノ南方二里)ニ通スル舊里道ノ北側ノ丘上ニ鐵鑛ノ露頭アリ「ツボ」松澤ト稱スル小溪流其北麓ヲ約東流ス、鑛床ハ花崗岩中ニ胚胎ス、其附近ニ古生代ノ粘板岩及砂岩ノ岩片散在ス、現時丘上ニ古生層ノ岩片ノ散在スルニ徴スレハ嘗テ其附近ニ露出セシ古生層ノ浸蝕セラレシモノナルヘシ
鑛床ハ約東西ニ走リ北方ニ八十度乃至八十五度ニ傾斜セリ、露頭部ニ

於テハ恰モ二個ノ鑛脈ヨリ成ルカ如キモ蓋シ一鑛床ニ屬スルモノナルヘシ、其走向延長約二十五尺、脈幅平均三尺二寸ナリトス

鑛床露頭ハ「ツボ」松澤ノ溪流面ヨリ八九十尺高キ處ニアルヲ以テ深サ百尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量千餘噸ナリトス

鑛石ハ雲母鐵鑛ニシテ其質良好ナルモ少量ノ黃鐵鑛ヲ隨伴セリ、該黃鐵鑛ハ雲母鐵鑛ノ空隙ニ結晶シタルモノナルヘシ

(ニ) 「タルガ」澤ノ露頭

「タルガ」澤ハ重茂澤ノ一支流ニシテ重茂澤本流ト後ニ述ヘントスル長洞澤(下見流澤)トノ間ニ於テ約南東ニ向ヘル一小溪流ナリ、其源頭附近ニテ溪流ノ南北兩側ニ鐵鑛ノ露頭アリ

鑛床ハ斑狀ノ黑雲母花崗岩中ニ胚胎スル鑛脈ニシテ上下兩盤ノ境界ハ判然タリ、花崗岩ハ大部分既ニ霉爛セリ

溪流ノ北側ニ露出スルモノハ傾斜急ナル山脊ノ南側ニアリテ重茂部落ノ平地ヨリ高キコト百二三十尺ナルヘシ、鑛床ハ其中央部ニ於テ少

シク曲レルモ概シテ約東西ニ走り北方八十度ニ傾斜ス、露頭ハ走向ニ沿ヒ延長五十五尺、脈幅平均一尺八寸ナルモ其地形及地質ニ依レハ走向ニ沿ヒ尙ホ十尺内外延長スルモノト信ス、依テ走向延長六十五尺ト推定シ、深サ百三十尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量二千餘噸ナリトス

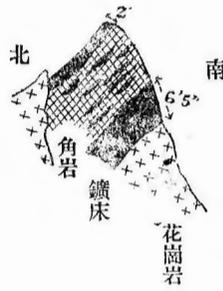
溪流ノ南側ニ露出スルモノハ其高距ニ於テ北側ノモノヨリ二三十尺高シ、鑛床ハ山側ノ上方及下方ノ二箇處ニ露出シ其間十四五米ヲ隔テ、高距ハ二十尺内外ノ差アリ、下ナルモノハ其走向北七十度東、傾斜北西七十五度ニシテ走向ニ沿ヒ延長約百三十尺、脈幅平均四尺アリ、上ナルモノハ北六十五度西ニ走り傾斜北東八十五度ヨリ直立ニ近ク走向延長二十五尺、脈幅平均一尺三寸ナリトス
深サ百五十尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ是等二露頭ノ鑛量約一萬二千噸ナリトス

(二) 下見澤流域

長洞澤ノ露頭

長洞澤ハ下見澤ノ一支流ニシテ其中流ノ北側ニ鐵鑛ノ露頭アリ、重茂部
 落ノアル平地ヨリ高キコト百四五十尺ナルヘシ
 鑛床ハ角岩ト斑狀ノ黑雲母花崗岩トノ接觸部並ニ角岩中ニ胚胎シ、急
 斜セル山側ノ南面ニ露出ス、露頭ニ於テハ鑛床ノ幅約四間アリ、其花崗

第四十圖 長洞澤ニ於ケル露頭



岩ニ接セル處ニテハ鑛石ノ品位良好ナル
 モ角岩中ニ胚胎スルモノハ品位極メテ貧
 劣ナリトス、鑛床ノ走向ハ東北東ニシテ北
 北西ニ急斜スルモノ、如ク鑛床胚胎ノ狀
 態ハ第十四圖ニ示スカ如シ、品位良好ナル

部分ハ上盤ト下盤トニアリ、下盤ニアルモノハ脈幅平均六尺五寸、上盤
 ニアルモノハ二尺ニシテ其走向延長ハ共ニ約百二十尺ナリトス、而シ
 テ是等ノ間ニ挾マリテ角岩中ニ胚胎スル鑛床ハ小ニシテ薄キ扁桃形
 ヲナシ角岩ノ厚サ十五尺内外ナルモ假リニ之ヲ探掘ストセハ實收ハ

百分ノ四乃至五ニ過キサレヘシ
鑛床ノ深サ百五十尺マテ探掘シ得ルモノトシテ計算スレハ鑛量二萬
五千餘噸ナリトス

(三) 重茂川流域

朴ノ木澤ノ露頭

朴^{ホウ}ノ木澤ハ重茂川ノ一支流ニシテ重茂部落ノ南々西約十五町ノ處ニ
テ本流ニ會ス、其北側ノ山脊ニ近キ南斜面ニ鑛床ノ露頭アリ、該露頭ハ
西北西ニ走リ殆ント直立スルモノ、如ク、走向ニ沿ヒ四尺五寸露ハレ
其西北西十尺内外ノ處ニ僅カニ露ハル、モノハ蓋シ其錘先ナルヘシ、
本鑛床ノ走向延長ヲ十五尺トシ、脈幅平均一尺二寸トス、露頭ハ其山麓
ヨリ高キコト約百尺ナルヲ以テ深サ百尺マテ探掘シ得ルモノトスル
モ鑛量二百餘噸ニ過キス、然レトモ其地形及地質ニ依レハ本鑛床ハ其
走向ニ沿ヒ尙ホ連續スヘケレハ探鑛ヲ要ス

(四) 十二神山區域

十二神ノ露頭

重茂川ノ一支流下山澤ノ源頭、十二神山(七百六十三米)ノ北東ノ山腹ニ鐵鑛ノ露頭アリ、該處ハ海拔高距五百米内外ニアリ

鑛床ハ古生代ノ黒雲母ヲ多量ニ含有スル砂岩ト之ヲ貫通セル石英斑

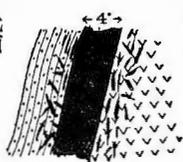
南東

岩トノ接觸部ニ胚胎シ(第十五圖參照)鑛床附近ニテハ

石英斑岩

砂岩及石英斑岩共ニ多少鑛染セラル、本露頭ハ

第五十圖



北西

鑛床
砂岩

走向北八十度西、傾斜北々東五六十度ニシテ其露頭ハ幅平均四尺、走向延長十四尺ニ過キス、鑛

床ノ深サ百尺マテ探掘シ得ルモノトスレハ鑛量八百餘噸ナリトス
本鑛床ハ其上部ノミ露ハレ其下底ハ未タ開掘セラレサルヲ以テ品位
良好ナルヤ否ヤ之ヲ判定シ難ク探鑛ヲ要ス

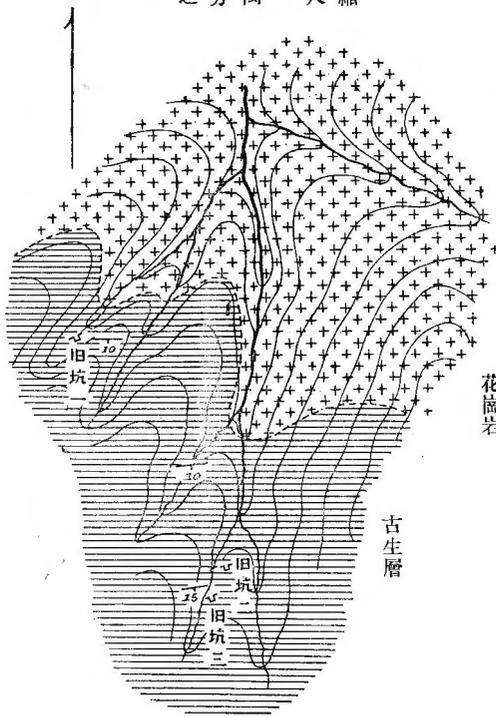
(五) 「ヨナ」澤流域

重茂部落ノ南東約十町ニシテ「ヨナ」澤ノ河口ニ達ス、夫レヨリ該溪谷ニ沿ヒ南方ニ向テ溯ルコト約十三町ニシテ粘板岩中ニ開口セル舊坑三

圖六十第

圖質地近附坑舊流上澤〔ナヨ〕

一之分萬一尺縮



花崗岩

古生層

アリ、假リニ舊坑一、舊坑二及舊坑三ト稱ス（第十六圖參照）、舊坑一及舊坑二ハ共ニ三四尺掘進シタルノミニシテ層向北七十度東、傾斜南東十度乃至十

五度ノ粘板岩中ニ賦存スル幅一尺内外ノ硫化鐵鑛ヲ探掘セリ、舊坑三八約三間掘進シテ中止セリ、是等坑内ニアル硫化鐵鑛ハ厚サ一尺内外ト稱スルモ其間鑛石ノミニ非スシテ剝離シ易キ粘板岩中ニ所謂「散リ

箔」ノ如ク散在セルモノニシテ鑛石トシテ探掘ニ堪ヘス沿革 重茂附近ノ鐵鑛發見ノ時代ハ明カナラサルモ稍古キカ如ク、今

ヨリ十三四年前盛岡ノ人河村某露頭ノ開掘ニ著手セルモ幾何ナラス
シテ中止シ、東京ノ人粒來某之ヲ繼承シ、後一條某ノ有トナリ、現時赤松
氏ノ有タリ

(六) 竈場澤流域

重茂ノ北方約一里半ノ地ニ荒牧ト稱スル一小部落アリ、其南方ニ約東

第十七圖 竈場澤ニ於ケル露頭



流スル一溪流アリ、竈場澤ト稱ス、海岸ヨリ該溪流ヲ溯ル約一里半ニシテ鐵鑛ノ露頭アリ、鑛床ハ石英斑岩ト「ホルンフェルス」トノ間ニ胚胎シ其走向北二十度西、傾斜東北東六十度ナリトス、其露頭ハ第十

七圖ニ示スカ如クニシテ懸崖ヲ成シテ露出シ、下部ニテハ幅四十四五尺、中央部ニテハ幅三十尺、上部ニテハ縮迫シテ二十二三尺トナレリ、其走向延長ハ比較的短クシテ約百尺ナリ
鑛石ハ品位良好ナラスシテ其大部分ハ長洞ノ角岩中ニ胚胎スルモノ

ニ比シテ稍優レルニ過キス、其良好ナル部分ハ上下兩盤ニ幅平均二尺ノモノ各一條アルノミ、露頭ノ最モ高キ處ハ海面上約百尺ナリ、本鑛床ノ良好ナル部分ノ海水準以上ノ鑛量ハ六千餘噸ニシテ其三分ノ二ヲ採掘シ得ルモノトスレハ約四千噸ノ鑛石ヲ得ヘシ、中央部ハ貧鑛ニシテ其幅二十六尺ナリ、鑛石ハ長洞ノ角岩中ニアルモノニ比シ稍優レルヲ以テ品位百分中三十五内外ノ鑛石ヲ採掘シ得ヘク其鑛量千餘噸ナリトス

(七) 其他ノ區域

重茂附近ニハ雲母鐵鑛ノ河川ノ流域ニ轉在スルモノ多ク即チ左ノ如シ

所在地域	大サ (徑)	個數
重茂澤流域		
一 水車ノ澤ノ露頭ヨリ約十尺高キ處	大 一尺二三寸 小 二三寸	大ナルモノハ三四個 小ナルモノハ多シ

二 水車ノ澤ノ西方ニ於ケル小丘中腹以下		一二寸 頗ル多シ
下 見 澤 流 域		
長 洞 澤 上 流	小大 一尺一二寸 一二寸	大ナルモノハ三四個 小ナルモノハ多シ
重 茂 川 流 域		
一 朴ノ木澤ノ露頭ヨリ西方ニ距ル約百間	小大 一尺四五寸 二三寸	大ナルモノハ三四個 小ナルモノハ頗ル多シ
二 朴ノ木澤ノ南東ニアル草木ノ澤ノ露頭附近	小大 一尺内外 二三寸	大ナルモノハ四五個 小ナルモノハ多シ

是ニ由テ之ヲ觀ルニ既記ノ諸鑛床ノ外ニ尙ホ幾多ノ鑛床ノ賦存スルハ想察スルニ難カラス、而シテ轉石ニシテ徑一尺以上ナルモノアルニ徴スレハ其鑛床亦小ナラサルヘク更ニ精査スヘキ地域ナリトス

(八) 鑛量及品位

重茂村ニ於ケル既知鐵鑛ノ埋藏量ヲ表示スレハ左ノ如シ

露頭所在地

推定鑛量

水車ノ澤

一、〇〇〇噸

大林ノ澤

五〇〇

「ツボ」松澤

一、〇〇〇

「タルガ」澤

一四、〇〇〇

長洞澤

二五、〇〇〇

朴ノ木澤

二〇〇

十二神

八〇〇

竈場澤

七、〇〇〇

計

四九、五〇〇

鑛石ノ品位ハ肉眼ニテハ「タルガ」澤ノモノ最モ良好ニシテ「ツボ」松澤ノ
 モノ之ニ亞キ、其他ハ局部ニ良好ナル部分アルモ概シテ良好ナラス
 既記ノ諸露頭ニ於テ採集セル鐵鑛ニ就キ本所分析係ニテ分析セシ結
 果左ノ如シ(百分中)

露頭所在地	鐵	滿	硅	磷	硫	水
水車ノ澤	四八・一三	現存セス	二七・一四	痕跡	〇・〇八四	〇・四七
大林ノ澤	四八・一九	〇・一一	二五・八二	同	〇・〇二九	〇・五五
「ツボ」松澤	五九・六二	現存セス	一二・一八	同	〇・二二〇	〇・五四
「タルガ」澤	六五・八三	同	三・四〇	同	〇・〇五〇	〇・二七
同	四一・九五	痕跡	三五・七六	同	〇・〇四七	〇・四五
長洞澤	五六・四六	〇・〇四	一六・二八	同	〇・〇三五	〇・五二
朴ノ木澤	五〇・七二	痕跡	二四・八四	同	〇・〇四六	〇・四五
龜場澤	六二・七一	同	七・三六	同	〇・四二九	〇・三四

豊間根村新田附近ヨリ南方ノ分水嶺ヲ越エテ大澤村ニ至ル間隨處ニ
 緩散在ス、緩ハ其色黒クシテ緻密ナルアリ、海綿狀ナルアリ、而シテ新田

附近ニ於テハ唐松澤及繫ツナギノ澤ノ溪谷、大澤村ニ於テハ金ヶ澤及山谷附近ニ最モ多量ニ散布シ地表下三四尺以下ニハ之ヲ見スト云フ
 土地ノ古老ニ就キテ糺スニ之ニ就キテハ口碑ノ傳フルモノナク何レノ時代ノモノナルヤ之ヲ知ルヲ得スト云フ、該鍬ニ就キ本所分析係ニテ分析セシ結果左ノ如シ(百分中)

鐵	滿	硅	燐	硫	水
四七・二四	現存セス	二一・〇二	〇・二四八	〇・〇三〇	〇・一九

之ニ依レハ恐ラクハ該鍬ハ往時ノ幼稚ナル製鍊法ニヨリテ鐵ヲ製セントシテ失敗セシモノナラン

丁 田老村ニ於ケル鐵鑛(第十八圖 參照)

田老村ハ下閉伊郡内ニ於ケル物貨集散ノ中心地タル宮古港ヲ北ニ距ル約四里ニアリ、其間海ニハ一日一回石油發動機船ノ便アルモ陸路ハ頗ル險惡ニシテ車馬ヲ通セス、交通極メテ不便ナリ、口碑ニ據レハ大同

年間ニ田老ニテ鐵ヲ製シ、原鑛ハ其附近ニ仰キシト稱スレトモ現時其痕ヲ止メス、其後ノ沿革明カナラス

鐵鑛ノ露頭ハ田老ニ於テ海ニ朝スル鋪ノ澤(一名乙部川ト云フ)ノ支流タル金堀澤及砥澤ニアリ

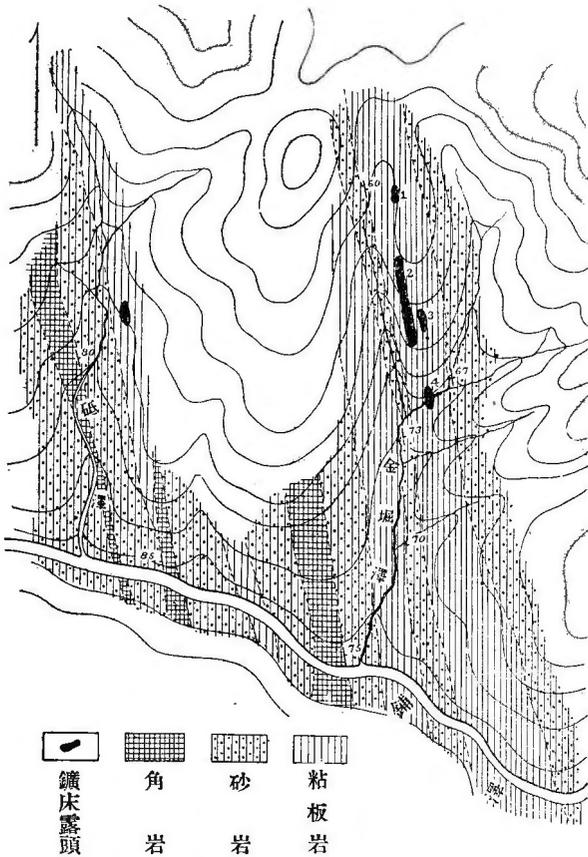
(イ) 金堀澤ノ露頭

田老ヨリ鋪ノ澤ニ沿ヒ北西ニ向テ同溪谷ヲ溯ルコト約一里半ニシテ金堀澤ニ至ル、其間地勢概シテ險峻ニシテ辛ウシテ人馬ヲ通シ得ヘシ」地質ハ古生代ノ粘板岩、砂岩及角岩ノ互層ヨリ成リ、其層向南北乃至北々西、傾斜概ネ東方六十度乃至八十度ナリトス、粘板岩ハ暗灰色或ハ淡灰綠色ニシテ剝離シ易ク、砂岩ハ暗灰色或ハ淡灰色ニシテ粗粒乃至細粒ナリ、角岩ハ緻密堅硬ニシテ灰色、白色若クハ灰褐色ヲ呈ス

鑛床ハ淡灰綠色ノ粘板岩中ニ胚胎シ層狀ヲ成ス、其露頭四箇處ニアリ、一號、二號、三號及四號ト稱ス、一號ト四號トハ其垂直高距約二百五十尺ナリ、二號ハ中央ニアリテ最モ大ナリ、而シテ一號ト四號トハ其間一部

圖 八 十 第
圖 質 地 ノ 澤 砥 及 澤 堀 金

一 之 分 萬 一 尺 縮



一部ニ明カニ硫化鐵鑛ヲ認ム、是ニ由テ考フルニ本鑛床ハ層狀ヲ成セル硫化鐵鑛ノ上部ノ變成シテ褐鐵鑛トナリシモノニシテ恐ラクハ其下底ニハ、未タ酸化セサル硫化鐵鑛ノ賦存スルナルヘシ沿革　本鑛床ノ露頭ハ今ヨリ約二十年前ニ發見セラレタルモ之ヲ採掘スルモノナク、大正六年八月二號ノ一部ノ表土ヲ除去シ約百貫ノ鑛石ヲ田老ニ搬出セリト云フ、現時多田文一郎ノ所有ニシテ休業中ナリ

(ロ) 砥澤ノ露頭

砥澤ハ鋪ノ澤ノ支流ニシテ金堀澤ノ西ニ隣リ略之ト平行シテ南流ス、地形及地質ハ金堀澤ニ同シ、鑛床ハ淡灰色ノ粘板岩中ニ層狀ヲ成ス、其露頭ハ溪流ノ東方ニテ河床ヨリ約五間高キ處ニアリ、其走向南北ニ近ク殆ント直立スルモノ、如ク、其走向延長約四十尺、厚サ平均五尺ナリ、深サ百尺マテヲ計算スレハ鑛量約三千噸トナルヘシ、假リニ其三分ノ二ヲ採鑛シ得ルモノトセハ二千噸ノ鑛量ヲ得ヘシ、鑛石ハ全ク金堀澤ノモノニ同シ

金堀澤及砥澤ニ於テ採集セル鐵鑛ニ就キ本所分析係ニテ分析セシ結果左ノ如シ(百分中)

露頭所在地	鐵	滿	俺	硅	酸	磷	硫	黄	水	分
金堀澤	五四・六五	現存セス	二・八二	〇・一〇〇	〇・〇二八	二・七二				
砥澤	五五・五八	同	二・一九	現存セス	〇・〇七一	二・六五				

(ハ) 金堀澤及砥澤ノ鑛床

之ヲ要スルニ是等二鑛床ハ其上部ニ鐵鑛トシテ之ヲ採掘スルヲ得ルモノアルモ運搬非常ニ困難ニシテ鑛量豊富ナラス、隨テ是等ノ鑛床ノミニテ鑛業ヲ經營スルコト困難ナルヘシ

青森縣下北半島砂鐵調查報文

青森縣下北半島砂鐵調查報文

目次

一	位置及交通	六三頁
二	沿革	六四頁
三	地形	六四頁
四	地質	六五頁
五	砂鐵	六八頁
六	砂鐵ノ品位	八四頁
七	鑛量	八五頁
八	結論	八六頁

青森縣下北半島砂鐵調查報文

農商務技手 白 土 大 祐

大正六年十二月下旬命ニ依リ青森縣下ニ出張シテ砂鐵調査ニ從事シ、茲ニ外業六日間ノ結果ヲ報告ス、調査當時積雪深クシテ調査充分ナル能ハサリシハ深ク遺憾トスルトコロナリ

一 位置及交通

下北半島砂鐵產地ハ半島ノ北海岸附近ニシテ青森縣下北郡東通村、田名部町、大畑村、風間浦村ニ跨リ就中東通村野牛沼附近ヲ主要ナリトス、東北線野邊地驛ヨリ北方田名部町ニ至ル十四里間ハ海濱ノ平坦ナル道路ナレトモ冬期ハ風雪ノ爲メ交通杜絶ス、田名部ハ郡役所々在地ニシテ西南一里半ニ大湊港ヲ控ヘ、郡内ノ貨客多クハ大湊ヲ經テ海上七時間青森ト交通スレトモ冬期ハ風波ノ爲メ航海屢杜絶ス、北西岸一體

ノ地ハ田名部ヨリ大畑、下風呂ヲ經テ大間迄縣道ヲ通スレトモ多クハ船ニ依リ函館ト連絡ス、田名部ヨリ入口、野牛沼、岩屋ヲ經テ尻屋ニ至ル八里ノ間郡道ハ急坂多ク漸ク馬車ヲ通スルニ過キス、域内人口稀薄ニシテ道路一般ニ險惡ナリ、冬期積雪ノ候ハ橇ニヨリ物資ヲ運搬ス、野邊地ヨリ分岐シテ大湊ニ至ル大湊線ハ大正十二年ヲ期シ開通セントス

二 沿革

下北半島砂鐵產地ノ沿革ハ之ヲ詳カニセスト雖モ舊幕時代ヨリ野牛沼海濱ノ砂鐵ヲ採取シ蒲野澤ニ於テ製鍊シタリシモ、燃料ノ不廉ナルト實收率ノ過少ナリシ爲メ、明治二十三年ノ交ニ至リ遂ニ事業ヲ中止セリ、而シテ洪積層中ニ於ケル砂鐵層ハ大正六年七八月ノ交發見セラレシモノ、如ク、本官巡回當時未タ鑛區ノ許可セラレシモノナシ

三 地形

下北半島ハ田名部地溝帶ニヨリ地形上東西ノ兩部ニ分タル、其西部地域ハ恐山火山聳立シテ陸奥灣ヲ擁シ、其東部地域ハ一般ニ百米内外ノ

臺地性丘陵地ニシテ漸次南方ニ高く、半島頸部ニ近ク安山岩ヨリ成ル
吹越山(五百一米)ニ連リ、其北端ニハ古生層ヨリ成ル四百十五米ノ尻屋
山アレトモ遠ク田名部ヨリ之ヲ望メハ平滑ナル圓頂ノ臺地ニ過キス、
東部地域ニ於ケル分水嶺ハ著シク東海岸ニ偏在シ、其西側ハ極メテ緩
慢ナル傾斜ヲ以テ田名部地溝帶ニ臨ム、田名部地溝帶ハ南北ニ連リ海
拔約二三十米ノ低キ臺地ナリ

太平洋岸及陸奥灣ノ北東部ニ面スル海岸ニハ狹キ平地アレトモ、北岸
津輕海峽ニ面スル部ハ野牛沼ノ狹小ナル平地ノ外凡テ約二三十米ノ
斷崖ヲ以テ直チニ海ニ迫ル

田名部川ハ域内最長ノ河川ナレトモ水量少ナク水勢緩ナリ、其沿岸ノ
沖積地ハ多クハ濕潤ニシテ蘆荻叢生シ、其下流田名部附近ニ稍廣キ乾
燥セル平地アルノミ、其他ノ河流ハ皆小ニシテ水量極メテ少ナシ

四 地 質

砂鐵產地附近ノ地質ハ古生層、第三紀層、洪積層及沖積層ヨリ成ル

古生層ハ地域ノ基盤ヲ構成シ、下部ヨリ硅岩、粘板岩、石灰岩ノ順序ニ成層ス、粘板岩及石灰岩ハ處ニヨリ互層シ岩屋以東ニ發達ス、層向ハ東部尻屋、赤阪ニ於テハ北三四十度西ニシテ南西約四十度ニ傾斜シ、西方ニ進メハ漸次其層向ヲ變シ岩屋ニ於テハ層向殆ント南北ニシテ西方ニ約四十度傾斜ス、古生層ヨリ成ル地域ハ緩慢ナル傾斜ヲ有スル山地ヲ成シ、岩屋部落ノ西端ニ於テ南北ニ走ル一大斷層ニ會シ其以西ニハ第三紀層及洪積層ヨリ成ル臺地ノ下ニ沒ス

第三紀層ハ頁岩及砂質頁岩ヲ主トシ裝部以南、野牛、蒲野澤、砂子又ニ互リ廣ク露ハレ古生層ヲ不整合ニ被覆ス、野牛沼東岸ニ於テハ其砂質頁岩ノ走向約北二十度東ヲ示シ西北西ニ緩斜ス、第三紀層ヨリ成ル地域ハ表面緩ナル波狀ノ臺地又ハ丘陵地ニシテ平均七八十米ノ高距ヲ有スル處最モ多シ

洪積層ハ下部ヨリ砂層、粘土層、又ハ墟母層ノ順序ニ成層シ、其中砂層ヲ主ナルモノトシ、時トシテハ砂層ノ下部ニ古生代岩石ノ礫ヨリ成ル礫

層アリ、本層ハ第三紀層ヲ不整合ニ被覆シ第三紀層ヨリ成ル臺地又ハ丘陵地ノ周邊ニ廣ク露ハレ、只僅カニ岩屋ヨリ赤阪ニ至ル地域ニテハ狭小ナル階段地ヲナシ直チニ古生層ヲ被覆ス、洪積層ハ一般ニ海拔約三四十米ノ平坦ナル低キ臺地ヲナシ多クハ水平ニ成層ス、但シ野牛沼東岸ノ臺地ニテハ層向略東西ニシテ南北ニ約十度傾斜スル緩慢ナル背斜層ヲ構成スルモノ、如シ、洪積層ハ其砂岩中ニ砂鐵ヲ含有スル處アリ

沖積層ハ河流及海濱ニ沿ヒ露ハル、河流ニ沿フモノハ粘土ヲ主トシ、田名部ノ小平地ニテハ厚サ一・五米乃至三米ノ泥炭ヲ埋藏ス、海濱ノモノハ砂礫ヲ主トシ、野牛沼ヨリ岩屋ニ至ル海濱ニハ砂鐵ヲ含有ス、田名部、大湊間沿道ノ沖積層ハ主ニ拳大ノ安山岩礫ヨリ成ル礫層ニシテ多クハ酸化鐵ニヨリ着色セラレ黄褐色ヲ呈ス

五 砂 鐵

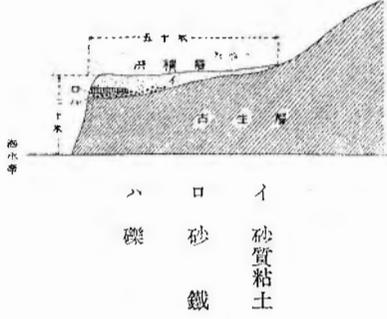
砂鐵ニ二種アリ、一ハ洪積層中ニ成層シ一ハ海濱ニ堆積ス

洪積層中ノ砂鐵ハ層ヲナシテ最下ノ砂層(厚サ約二乃至三米)又ハ礫層(厚サ〇・五米乃至一米)ノ上ニ成層シ多クハ砂層ニ被覆セラレ野牛沼西岸ニ於テノミ砂質粘土層ヲ以テ覆ハル、而シテ砂層ノ上ハ粘土層又ハ壩母層ナリトス、積雪深ク之ヲ確言スルコト能ハサレトモ地表ヨリ砂鐵層マテノ深サハ視察シ得タル範圍ニ於テハ多クハ二米乃至五米ナレトモ斐部川右岸(上流ニ向ヒ)ニ於ケルモノハ直チニ地表ニ露ハル、砂鐵層ハ磁鐵鑛及石英砂ヨリ成リ、磁鐵鑛ノ風化ニヨリ成生セラレタル褐鐵鑛ニヨリ膠結セラレ赤褐色ヲ呈シ稍堅硬ナルモ石英砂ノ多キトコロハ淡褐色ニシテ柔軟ナリ、時トシテハ本層中古生代岩石ノ小礫多キ薄層アリ、又砂粒多キ淡褐色ノ部ト砂粒少ナキ赤褐色ノ部ト互層シ縞狀ヲ呈スルコトアリ、砂鐵層ハ最厚十五米以上ニ達スルコトアレトモ所ニ依リテハ全ク之ヲ見ス、變化甚タシク其平均ノ厚サヲ知ルコト困難ナリ

沖積層ノ砂鐵ハ海濱ニ堆積シ成層スルコトナシ

露頭 (イ) (參照圖) 露頭部ハ海拔約十五米、幅約五十米ノ南北ニ狹長ナル古
 生層ノ海蝕階段地ニシテ厚サ約五米ノ洪積層之ヲ被覆ス、洪積層ハ下
 部ヨリ礫層(厚サ約一米)、砂鐵層(厚サ約一米半)、砂質粘土層(厚サ約二米半)

第一 露頭 (イ)



ノ順序ニ成層シ、礫層ハ拳大乃至鶏卵大ノ硅
 岩、粘板岩、角岩等ノ礫ヨリ成リ其上部砂鐵層
 ト接スル所ニハ頭大ノ閃綠岩礫ヲ有ス、砂鐵
 層ハ磁鐵鑛及石英砂ヨリ成リ、磁鐵鑛ノ風化
 ニヨリ成生セラレタル褐鐵鑛ニ依リ膠結セ
 ラレ赤褐色ヲ呈シ稍堅ク、鉄ヲ用フルニ非サ
 レハ掘ルヲ得ス

ハ漸次ニ低ク、露頭部ヲ距ル北東約百米ノ所ニテハ其高サ海拔約十米
 内外トナリ遠ク尻屋岬ニ連互ス、階段地ノ高サ減スルニ從ヒ砂鐵層ノ
 厚サ亦減シ、露頭部ヲ距ル北東七十米ノ所ニテハ砂鐵層ト認ム可キナ

ク單ニ礫層ノ淡赤褐色ヲ呈スルニ止マリ其以東ニハ砂鐵層ヲ見ス
露頭部ニ於ケル砂鐵層ハ僅カニ塔段地ノ崖端ニ賦存シ其全幅ニ互リ
テハ存在セサルモノ、如シ

露頭(口) 露頭部ハ海拔約十五米、幅約六十米ノ南北ニ狹長ナル古生層
海蝕塔段地ニシテ厚サ約六米ノ洪積層之ヲ被覆ス、洪積層ハ下部ヨリ
礫層(約半米)、砂鐵層(約四米)、砂層(約二米)ノ順序ニ成層ス、礫層ハ多ク拳大
ノ古生代岩石ノ礫ヨリ成リ古生層ヲ被覆シ、砂鐵層ハ暗赤褐色ヲ呈シ
稍堅ク古生代岩石ノ小礫ヲ含有ス

露頭部ニ於ケル溪流ヲ湖ルニ其兩側ノ洪積層ハ厚サ著シク薄ク、露頭
部ヨリ上流僅カニ十米ニシテ礫層及砂鐵層尖滅シ一米乃至三米ノ砂
層ノミヨリ成リ、時ニ古生層ノ直チニ地表ニ露出スルモノアリ

露頭(ハ) 露頭部ハ岩屋部落北東端ノ墓地ニアリ、海拔約二十米、幅約七
八十米ノ北東北―南西南ニ連ル古生層海蝕塔段地ニシテ厚サ約十米
ノ洪積層之ヲ被覆ス、洪積層ハ下部ヨリ礫層(約〇・三米)、砂鐵層(約七米)、砂

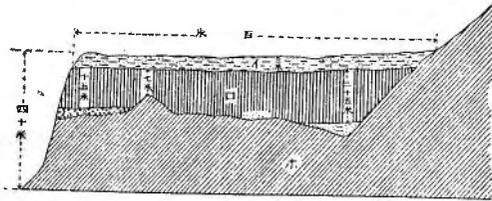
質粘土層(約二米)ノ順序ニ成層シ、礫層ハ古生代岩石ノ拳大ノ礫ヨリ成
リ、砂鐵層ハ暗赤褐色ヲ呈シ稍堅シ

露頭(イ、ロ、ハ)間ニハ塔段ノ斷崖ニ砂鐵層ノ露出スル所數箇處アリ、砂鐵
層ハ處ニヨリ其下ニ礫層又ハ砂層アリテ古生層ヲ被覆スレトモ斷續
シテ露ハレ、或ハ古生層ノ直チニ地表ニ露出スル所アリ、蓋シ本砂鐵層
ハ之ヲ連續セル一層ト認メ難シ

露頭(ニ) (第二圖 參照) 露頭部ハ岩屋部落中央ノ海拔約二十米、幅約百米ノ北東
ヨリ南西ニ連互セル古生層海蝕塔段地ニシテ厚サ約二十米ノ洪積層
之ヲ被覆ス、洪積層ハ下部ヨリ礫層(約二米)、砂鐵層(約十五米)、砂質粘土層
(約二米)ノ順序ニ成層ス、礫層ハ主ニ古生代岩石ノ礫ヨリ成リ他ニ少量
ノ閃綠岩ノ頭大ノ礫ヲ夾雜ス、砂鐵層ハ赤褐色ヲ呈シ稍堅ク、其最上部
約三米ノ部ノミハ砂ヲ交フルコト多ク爲メニ其色淡褐色ニシテ柔軟
ナリ、露頭部ニ於ケル細流ヲ溯ルニ砂鐵層ハ其厚サニハ變化アレトモ
塔段地ノ全幅ニ互リ賦存スルモノ、如シ、而シテ礫層ハ塔段地ノ海ニ

面スル部分ニノミ發達シ、海ト反對ノ側ニ於テハ砂層ハ洪積層ノ最下部ヲナシ古生代石灰岩ヲ被覆ス

第二圖
露頭(二)



イ 砂質粘土層
ロ 砂鐵層
ハ 礫層
ニ 砂層
ホ 古生層

露頭部ニ於ケル塔段地ハ漸次南西ニ廣ク高サ四十米内外ナリ、而シテ砂鐵層ハ十米乃至十二米ノ厚サヲ有シ海面スル此斷崖ニ沿ヒ露出シ次ノ露頭ニ至ル約百五十米ノ間連續ス

露頭部(ホ) 露頭部ハ岩屋部落西南隅、海拔約三十米、幅約二百米ノ古生層海蝕塔段地ニシテ厚サ約八米ノ洪積層之ヲ覆フ、洪積層ハ下部ヨリ礫層(約〇・三米)、砂鐵層(約五米)、砂層(二米乃至三米)ノ

順序ニ成層ス、礫層ハ古生代岩石ノ礫ノ外少量ノ閃綠岩礫ヲ交フ、砂鐵層ハ其下部四米ハ赤褐色ニシテ稍堅ク膠結セラレトモ上部一米ノ

間ハ砂ヲ交フルコト稍多量ニシテ淡褐色ヲ呈シ柔軟ニシテ漸次上部ノ砂層ニ移化ス

露頭(へ) 露頭部ハ(ホ)ヲ西南西ニ距ル約百五十米、海拔約三十米、幅約二百五十米ノ古生層海蝕塔段地ニシテ、厚サ約十米ノ洪積層之ヲ被覆ス、古生層ハ本露頭部ニ於テハ甚タシク錯亂セラレ不規則ニ皺曲ス、洪積層ハ下部ヨリ礫層(約〇三米)砂鐵層(約七米)砂質粘土層(三米乃至四米)ノ順序ニ成層シ、礫層ハ主ニ古生代岩石ノ礫ヨリ成リ他ニ少量ノ閃綠岩ノ大礫ヲ含有ス、砂鐵層ハ其一部ニ古生代岩石ノ小礫ヲ有スレトモ其大部分ハ磁鐵鑛及砂ヨリ成リ二次性ノ褐鐵鑛ニヨリ膠結セラレ赤褐色ヲ呈シ稍堅シ、而シテ砂鐵層ト其上部ノ砂質粘土層トノ境界ハ頗ル明瞭ナリ

露頭(ホ)、(へ)間ニハ砂鐵層ハ塔段ノ斷崖ニ沿ヒ連續シテ露出シ、其厚サ(ホ)ニ於テ最モ薄ク、(へ)ニ於テ最モ厚シ、尙ホ(へ)ノ露頭ハ斷崖ニ沿ヒ西南西ニ約二百米以上之ヲ追跡スルコトヲ得、其間砂鐵層ノ厚サニハ大ナル

變化ナク最モ薄キトコロニテモ五米ヲ下ラサルカ如シ
露頭(ト) 露頭(ヘ)ヲ西南西ニ距ル約二百米以上、淺キ谷ヲ溯ルコト約二
百五十米ニシテ砂鐵層ノ露頭アリ、露頭部ハ海拔三四十米、幅約四百五
十米ノ洪積層臺地ナリ、砂鐵層ハ薄キ砂質粘土層ニ被覆セラレ砂ヲ交
フルコト多ク柔軟ナリ、其厚サ約五米ハ之ヲ測ルヲ得タレトモ吹雪ノ
爲メ其以下ノ厚サヲ知ラス
本露頭ヲ東ニ距ル約百五十米ノ畑地ニ砂鐵層ノ露頭ヲ見タレトモ吹
雪ニ妨ケラレ其厚サヲ知ル能ハス
露頭(チ) 露頭部ハ海拔約三十米ノ洪積層臺地ニシテ岩屋裝部間ノ烏
賊小屋ノ谷ヲ東ニ入ルコト約二百米ニシテ厚サ約十五米ノ砂鐵層ア
リ、極メテ薄キ砂質粘土層ニ覆ハレ砂層ヲ被覆ス、砂鐵層ハ其中央部五
米ハ稱豎ク他ノ部分ニ比シ著シク凸出シ暗褐色ヲ呈ス、上部七米ハ暗
褐色ヲ呈シ磁鐵鑛ニ富ムモ褐鐵鑛ニヨリ膠結セラル、コト甚タシカ
ラサルヲ以テ柔軟ナリ、下部三米ハ淡褐色ニシテ砂ヲ交フルコト多ク

漸次柔軟ナル砂層ニ移過スルモノ、如シ

露頭部ニ於ケル砂鐵層ハ溪谷ノ斷崖ニ沿ヒ約三十米ノ間ハ之ヲ追跡スルコトヲ得

露頭(リ) 露頭部ハ斐部川右岸(上流ニ向ヒ)海拔約三十米ノ洪積層臺地ニシテ砂鐵層ハ直チニ地表ニ露ハル、砂鐵層ハ砂ヲ交フルコト多ク淡褐色ニシテ柔軟ナリ、其層厚ハ風雪ノ爲メ之ヲ知ル能ハス

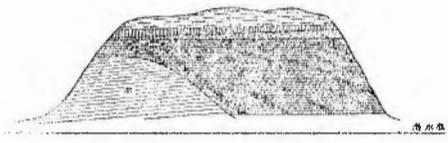
露頭(ヌ) 露頭部ハ海拔約二十五米ノ洪積層臺地ノ野牛沼ニ面スル傾斜面ニシテ洪積層ハ下部ヨリ厚キ砂層、礫層(約半米)、砂鐵層(約三米餘)、砂質粘土層(約五米)ノ順序ニ成層ス、礫層ヨリ上ハ殆ント水平ニ成層シ、下部ノ砂層ハ其層向明瞭ナラサレトモ礫層ニヨリ不整合ニ被覆セララル、モノ、如シ、蓋シ本砂層ハ第三紀層ニ屬スルモノナル可キカ、砂鐵層ハ其下部約二米ハ暗褐色ヲ呈シ稍堅キモ上部ハ砂ヲ交フルコト多ク柔軟ニシテ漸次砂質粘土層ニ移過スルモノ、如シ

露頭(ル) 露頭部ハ(ヌ)ノ南方約三百米ノ谷ヲ隔ツル海拔約三十五米ノ

カ如シ、礫層ハ主ニ古生代岩石ノ拳大ノ礫ヨリ成リ他ニ僅カニ閃綠岩ノ頭大ノ礫ヲ有ス、砂鐵層ハ能ク膠結セラレ暗褐色ヲ呈シ質稍堅ク鶴

第四圖 露頭(ル)

縮尺千分之一



イ 砂質粘土層
ロ 砂鐵層
ハ 礫層
ニ 擬層アル砂層
ホ 砂層

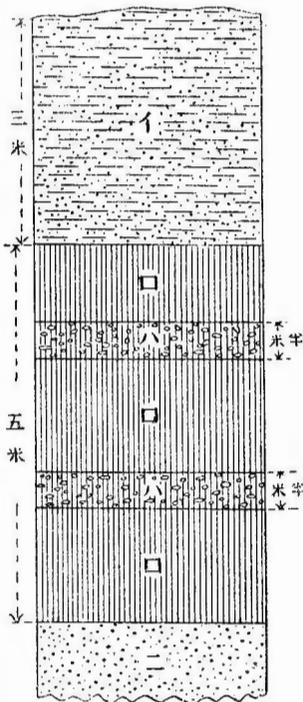
ノ、ミトナリ閃綠岩礫ヲ有セサルニ至ル、本砂鐵層ハ尙ホ南東ニ互リ廣ク賦存スルモノ、如シ

露頭(ヲ)第五圖(參照) 露頭部ハ(ル)ヲ距ル南方約百五十米、海拔約三十五米ノ洪

嘴ヲ用フルニ非サレハ採掘困難ナリ、本砂鐵層ハ臺地ノ北方ニテハ其厚サ約一米半以上アレトモ之ヲ南方ニ追跡スルコト約五六十米ノ處ニテハ其厚サ一米以下ニ縮迫ス、砂鐵層ノ厚サ減スルニ從ヒ下部ノ礫層ハ漸次厚ク砂鐵層ノ一米以下トナル所ニテハ約二米トナル、礫層ノ肥大スルヤ礫ノ大サ漸次小トナリ豆大乃至鷄卵大ノモ

積層臺地ナリ、洪積層ハ層向殆ント東西ニシテ南約十度ニ傾斜シ、下部ヨリ厚キ砂層、砂鐵層(約五米)、砂質粘土層(約三米)ノ順序ニ成層ス、砂鐵層ハ赤褐色ニシテ稍堅ク、中部及上部ニ厚サ各半米ノ古生代岩石ノ小礫ヲ有スル帶アリ

第五 露頭
圖 (ヲ)



イ 砂質粘土層
ロ 砂鐵層
ハ 砂鐵層 (礫アル帶)
ニ 砂層

本露頭部ニ於ケル砂鐵層ハ露頭(ル)ヨリ連

續スルモノ、如ク、尙ホ南東ニ互リ存在スルモノ、如シ
露頭(ワ) 露頭部ハ(ヌ、ル)間ノ谷ヲ東南東ニ約千五百米入りタル海拔約
四五十米ノ臺地ナリ、砂鐵層ハ厚サ約十米、暗褐色ヲ呈シ柔軟ニシテ墟
母(約三米)ヲ頂キ、其下部ハ淡褐色細粒砂層ニ移過スルモノ、如シ

露頭部(カ) 露頭部ハ野牛沼西岸、海拔約二十米ノ洪積層臺地ナリ、洪積層ハ上部ヨリ壩母(約二米)砂質粘土層(約三米)砂鐵層(測リ得ル部分約十米)ノ順序ニ成層ス、砂質粘土層ハ其上部ハ著シク粘土質ナルモ其下部ハ甚タシク砂質ニシテ砂鐵層ト接スル部ニハ閃綠岩ノ大礫點在スレトモ礫層ナシ、壩母及砂質粘土層ハ水平ニ成層シ砂鐵層ヲ不整合ニ被覆スル如キモ積雪深クシテ其真相ヲ究ムル能ハス、砂鐵層ハ暗褐色ニシテ稍堅キ部ト砂粒ヲ交フルコト多量ニシテ淡褐色ヲ呈シ柔軟ナル部ト互層シ縞狀ヲ呈ス

露頭部ニ於ケル砂鐵層ハ臺地ノ斷崖ニ沿ヒ南北約二百米以上ノ間露出スルカ如キモ露頭部ヲ距ル西方六七十米ノ處ニテハ砂鐵層ノ層位ハ砂層之ヲ占有シ更ニ砂鐵ヲ見ス

露頭部(ヨ) 露頭部ハ入口部落ノ東端海拔約十五米、野牛沼西岸ヨリ連互セル洪積臺地ニシテ厚サ約二米ノ壩母ノ下ニ厚キ砂層アリ、此砂層中上部ヨリ約半米ニシテ厚サ約半米ノ砂鐵ニ富ム部分アリ、赤褐色ヲ呈

シ柔軟ニシテ其下部ハ砂層ニ移過ス

露頭(タ) 露頭部ハ入口、石持ノ中間、海拔約四十米ノ洪積層臺地ナリ、砂

鐵層ハ其厚サ約半米ニシテ暗赤褐色ヲ呈シ二次性褐鐵鑛ニヨリ膠結

セラレ稍堅シ、本層ハ淡褐色細粒砂層ヲ被覆シ上部ハ砂層及墟埠層ニ

覆ハル、積雪ノ爲メ本層以外ノ地層ノ厚サヲ測ルヲ得ス

露頭(レ) 露頭部ハ目名、石持間道路ノ蒲野澤ヘノ分岐點附近海拔約三

十米ノ洪積層臺地ナリ、砂鐵層ハ其厚サ約一米ニシテ殆ント水平ニ成

層スルモノ、如ク暗赤褐色ヲ呈シ二次性褐鐵鑛ニヨリ膠結セラレ稍

堅シ、本層ハ厚キ淡褐色ノ細粒砂層ヲ被覆シ、厚サ約五米ノ砂質粘土層

ニ覆ハル

露頭(ソ)(第六圖參照) 露頭部ハ女館部落北方、田名部、大畑間、縣道ヨリ大利ニ至

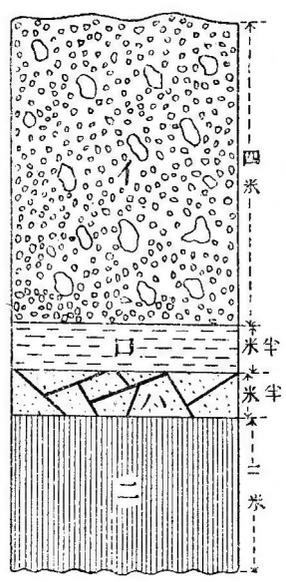
(ル分岐點附近ノ切割ニシテ圖ニ示スカ如ク洪積層ハ下部ヨリ砂鐵層

測リ得ル厚サ約二米)擬層アル砂層(約半米)淡灰色粘土層(約半米)礫層(約

四米)ノ順序ニ成層ス、砂鐵層ハ層向殆ント南北ニシテ東方約三十五度

ニ傾斜シ、厚サ一寸乃至三四寸ノ暗褐色ニシテ稍膠結セル部ト、砂多キ淡褐色ノ部ト互層シ縞狀ヲ呈ス、砂鐵層ヲ被覆セル上部ノ層ハ凡テ水平ニ成層シ兩者ノ間ニ不整合アリ、礫層ハ安山岩礫ヲ主トシ他ニ僅カニ古生代岩石ノ小礫ヲ含有ス

第六圖
(ソ)頭露



イ 礫層
ロ 粘土層
ハ 砂層
ニ 砂鐵層

本露頭部ヲ距ル北方約五十米ニシテ砂鐵層ノ露頭アリ、層向北七十五度西ニシテ東北東約三十五度ニ傾斜ス、砂

鐵層ハ縞狀ヲ呈シ露頭(ソ)ニ於ケルモノト異ナラサレトモ、上部砂層ト接スル所ニ暗赤褐色ニシテ能ク膠結セル稍堅キ部分アリテ殆ント水平ニ成層スルモノ、如シ、砂層及粘土層ハ水平ニ成層シ砂鐵層ヲ不整合ニ被覆ス、本露頭部ニ於テハ最上層トシテ礫層ヲ見ス

前記二露頭ニ於ケル砂鐵層ハ其成層狀態及上部層トノ關係ヨリ考察スルニ其賦存ノ區域廣大ナラサルモノ、如シ

沖積層ノ砂鐵 野牛沼ヨリ岩屋部落ニ至ル海濱ニ稍廣大ナル區域ニ互リ沖積層砂鐵アリテ、野牛沼ヨリ岩屋西端烏賊小屋ノ谷ニ至ル延長約四千米アリ、海濱ノ幅ハ野牛沼ニ於テ最モ廣ク約四百米、岩屋西端烏賊小屋ノ谷ニ於テ最モ狹ク約八十米ニシテ中間斐部川ニ於テ約百五十米アリ、砂鐵ノ堆積狀態ハ所ニヨリ其趣ヲ異ニスレトモ多クハ石英砂及磁鐵鑛ヨリ成リ時ニ輕石ノ小礫ヲ交フルコトアリ、而シテ其厚サ○三米乃至一米ナルカ如シ

本海濱ニ於テ汀線ヲ距ル五十米乃至百米ニシテ高サ半米乃至二米ノ低キ塔段ノ岩屋西端烏賊小屋ノ谷ヨリ野牛沼北東ニ連互スルモノアリ、本塔段地ノ上部ハ多クハ殆ント磁鐵鑛粒(砂鐵)ノミヨリ成リ他ニ僅少ノ石英粒ヲ交フ、而シテ此砂鐵ハ所ニヨリ其厚サヲ異ニスルモノ、如ク、岩屋烏賊小屋ノ濱ニ於テ約三米、斐部川ニ於テ約一米、野牛沼北東

階段地ノ盡ル所ニ於テハ約〇三米ニシテ其幅員不明ナリ

六 砂鐵ノ品位

調査區域ニ於ケル砂鐵中其數種ヲ本所分析係ニ於テ分析シタル結果
左ノ如シ(百分中)

(x)	(チ)			(へ)	(ホ)	(ホ)	露頭記號	水分	鐵	「チ タ ニ ウ ム」
	下 部	中 部	上 部		ノ 下 部	ノ 上 部				
一〇六	一五五	一三三	一八九	一四九	一三五	一〇〇				
二五〇三	三一六三	一九二五	二〇九〇	二六四〇	四〇一五	八七九				
一九七	一〇六	一五三	一五三	一三六	三六六	〇四六				

七 鑛 量

洪積層ノ砂鐵 岩屋部落附近ニ於テ露頭(ニ)、(ホ)、(ヘ)、(ト)ヲ包括スル區域ニ

沖積層ノ砂鐵	一九・〇五	〇・五九	一・九八	同	五六・四二	同	同
洪積層ノ砂鐵	三八・五〇	一・四一	三・〇三	現存セス	二五・九〇	現存セス	現存セス
	鐵	滿 俺	「チタニウム」	銅	硅 酸	磷	硫 黃

同 (塔段狀ノ所)			〇・〇八		五五・七五		五・五七
沖積地ノ砂鐵			〇・一九		一九・五〇		一・八四
(ナ) 含 礫・帶			一・三七		一三・七三		〇・九〇
(ナ)			一・五七		三八・五七		三・〇六
(ル)			一・三八		三八・五〇		三・三〇

於テハ地表ヨリ二米乃至五米ノ深サニ於テ厚サ約三米ヲ下ラサル砂鐵層ノ賦存スルモノ、如シ、假リニ其面積ヲ長サ四百米、幅二百米トシ砂鐵一立方米ノ重量ヲ三・三噸トセハ其砂鐵量七十九萬二千噸ヲ算シ砂鐵ノ品位ヲ鐵百分中四十トセハ鐵ノ總量三十萬噸餘ナル可シ、洪積層ノ他ノ區域ニ關シテハ未タ鑛量ヲ計算ス可キ充分ナル資料ヲ得ル能ハス

沖積層ノ砂鐵 野牛沼ヨリ岩屋ニ互ル海濱ノ砂鐵ハ延長四千米、幅平均百米ノ間ニ分布シ其厚サハ所ニヨリ變化甚タシク、岩屋烏賊小屋ノ海濱ニ於テ約一米半、斐部川海濱ニ於テ約〇・三米、野牛沼北東海濱ニ於テ約半米、野牛川河口ニ於テ約〇・三米ニシテ平均半米内外ナルモノ、如キモ所ニヨリテハ砂鐵ヲ見サル所アリテ其堆積ノ極メテ不規則ナルヲ示スモノ、如シ、而シテ本砂鐵ノ平均ノ品位ハ鐵百分中二十ヲ出テス、其鑛量ハ他日ノ精査ヲ俟ツニ非サレハ之ヲ確言スルヲ得ス

八 結 論

下北半嶋ノ砂鐵ハ洪積層中ニ成層スルモノト海濱ノ沖積地ニ堆積スルモノトアリ

洪積層中ノ砂鐵 田名部地溝帶ヲ構成セル田名部、女館、大利、目名ニ互ル田名部川沿岸ノ洪積層臺地ニハ女館(露頭ソ)及目名(露頭レ)ニ於テ砂鐵層ノ露頭ヲ認ムレトモ其成層狀態甚タ不規則ニシテ局部堆積ナル可ク、或ハ多ク望ヲ囑ス可カラサルカ如シ、而シテ野牛沼ヲ中心トスル洪積層臺地ニハ所々ニ砂鐵層ノ露頭アリ、積雪ノ爲メ踏査盡サスト雖モ砂鐵層ノ廣ク連續スルモノアルカ如シ、融雪ニ際シ精査ヲ要スル地域タル可シ

沖積層中ノ砂鐵 野牛沼ヨリ岩屋ニ至ル海濱ニ沿ヒ延長約四千米、幅平均百米ノ間ニ砂鐵ノ賦存スルモノアリト雖モ其品位概シテ良好ナラス、加フルニ其堆積ノ狀態不規則ナルカ如ク、他日ノ精査ヲ俟ツニ非サレハ之ヲ確言スルヲ得ス

福島縣雙葉郡陶土調查報文

福島縣雙葉郡陶土調查報文

目次

一	位置及地形	九〇頁
二	地質	九一頁
三	陶土	九七頁
四	結章	一〇一頁

福島縣雙葉郡陶土調査報文

農商務技師 納 富 重 雄

相馬大堀焼ハ單ニ之ヲ相馬焼ト稱シ、元祿年間大堀村ノ人半谷休閑大堀ノ南方ニ位スル美森參(陶土ノ章)ノ土ヲ採取シテ陶器ヲ製シ時ノ藩主相馬長門守忠胤ニ獻セシニ始マレリ、爾來之カ製造ニ從事スルモノ増加シ寶永年間ニハ製造戸數百六戸ニ及ヒタルヲ以テ藩主ハ大堀村ニ陶器役所ヲ設ケ家臣ヲ派シテ之カ保護獎勵ニ努メタリ、其後幾何ナラスシテ市況不振ニ伴ヒ本業亦稍衰ヘ明治ノ初年ニ至リ著シク衰微セリ、明治十三年西白河町ノ人大木吉兵衛相馬陶器會社ヲ組織シ本業ノ復興ヲ企圖セシモ業未タ盛ナルニ至ラスシテ同十六七年同會社ハ遂ニ解散スルニ至レリ、同十九年ヨリ同二十一年頃ニ至ル間ニ於テ本業ハ稍挽回ノ機運ニ向ヒタリシモ粗製濫造ノ結果

幾何ナラスシテ更ニ衰微シ爾來二十餘年間僅カニ其業ヲ繼續シタ
 リ、近時陶器ノ品質ヲ改良スルト共ニ販路ノ擴張ニ努メ從業戶數約
 五十戶(半農半工)ニ及ヒ年産額三四萬圓ニ達シ茲ニ所謂相馬燒ノ復
 興ヲ見ントス、然ルニ從來ノ採掘地ニ於テハ其原料タル陶土ハ殆ン
 ト採掘シ盡サレ再ヒ本業ニ一頓挫ヲ來サントスルニ至リ、乃チ諸處
 探求ノ結果大野村上野上ニ於テ陶土ヲ發見セリ、而シテ大堀ヨリ同
 地ニ至ル約二里ノ間ハ坂路多ク車馬ヲ輓用スル能ハスシテ之ヲ大
 堀村ニ運搬スルニ困難ナリ、故ニ該陶土ニシテ其量多ク品質良好ナ
 ルニ於テハ之ヲ運搬スヘキ道路ノ開鑿ヲ要ス、本官命ヲ受ケ該陶土
 ノ調査ニ從事シ約十日ヲ以テ之ヲ結了セリ、本調査ニ際シ福島縣工
 業技師佐久間石太郎氏特ニ同行セラレ調査上多大ノ便宜ヲ得タリ、
 茲ニ謝意ヲ表ス

一 位置及地形

調査區域ハ苜野、大堀、長塚、新山及大野ノ五箇村並ニ浪江町ニ跨リ、陶器

ノ製造地タル大堀ハ域内ノ中央ヨリ稍北ニ偏シ常磐線浪江驛ヲ西ニ
距ル約一里半ノ地ニアリ、調査區域ノ東半ハ低卑ナル丘陵地ニシテ約
東西ニ連互シ東方ニ陵夷シ其西ニ隣レル西半ハ地形急ニ高ク峻峻ナ
ル山岳地ヲ成シ其山側ハ急斜シ其溪間ハ狹隘ナリトス

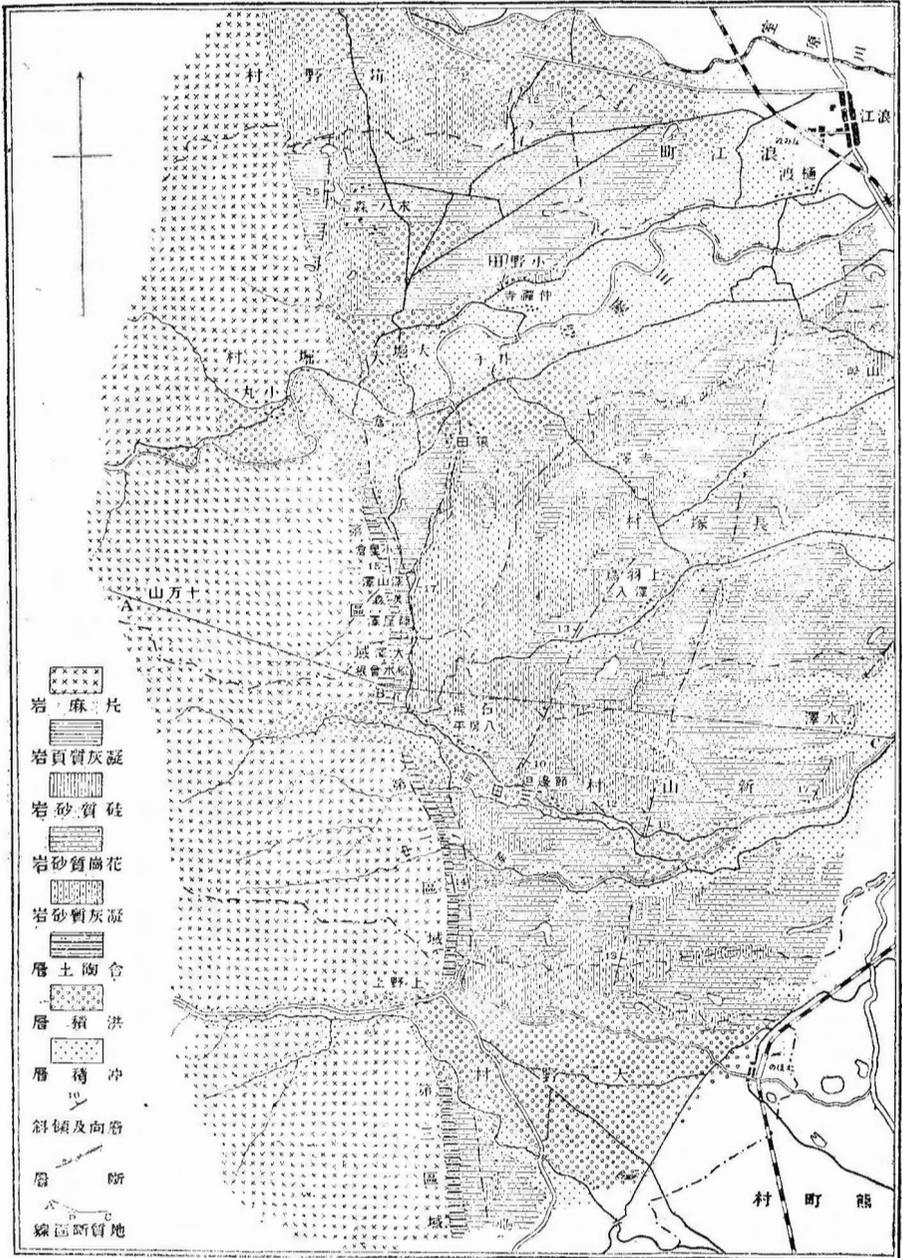
二 地 質

(地質圖參照)

調査區域ハ片麻岩、第三紀層(含陶土層ヲ含ム)、洪積層及沖積層ヨリ成ル、片麻岩ハ
調査區域ノ西半ヲ領シ概シテ粗粒ニシテ肉紅色ノ正長石、白色ノ斜長
石、石英、角閃石及黒雲母ヨリ成リ角閃石ハ黒雲母ヨリ多量ナリトス、之
ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ上記ノ鑛物ノ外副成分トシテ磁鐵鑛、褐簾石、風
信子鑛等アリ、本岩ニハ花崗岩質ノモノヨリ綠泥片岩質ノモノアリテ
區域ノ東方ニテハ一般ニ著シク綠色ヲ呈シ片狀構造明カナルトコロ
ハ綠泥片岩ニ類似シ西方ニハ漸次花崗岩質トナリ、兩者ノ境界ヲ劃ス
ルコト困難ナリ、故ニ地質圖上ニハ假リニ兩者ヲ片麻岩トシテ塗色セ
リ、本岩ノ特ニ暗綠色ニシテ風化柔軟トナレル部分ハ陶器ノ釉藥トシ

福島縣雙葉郡大塚附近地質圖

縮尺七萬五千分之一

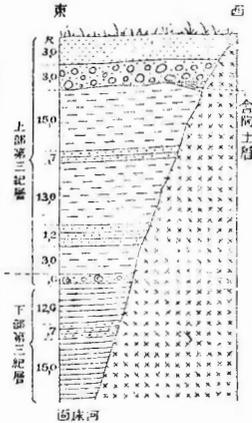


テ使用セラル

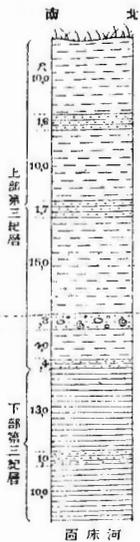
第三紀層ハ調査區域ノ東半ニ露出シ片麻岩ヲ不整合ニ被覆ス、本層ハ

大堀村ニ於ケル第三紀層ノ累層狀態

第一圖 高倉ノ懸崖



第二圖 猿田ノ懸崖



第三圖 小野田ノ懸崖



- 片麻岩
- 硅質砂岩
- 花崗質砂岩
- 砂質頁岩
- 玉置介子含有スル砂岩
- 洪積層
- 表土

第一、第二及第三圖ニ示スカ如ク花崗質砂岩層ハ其下底ニ近ク或ハ其下底ニ玉置介ヲ含有スル薄層ヲ挾有シ之ニヨリ便宜上

本層ヲ上下部ニ分ツコト左ノ如シ

下部第三紀層 凝灰質頁岩層、硅質砂岩層

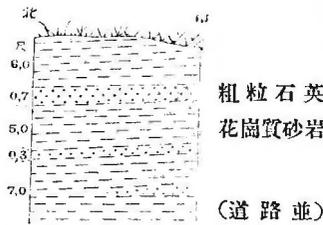
上部第三紀層 花崗質砂岩層、蠻岩層、凝灰質砂岩層

凝灰質頁岩層ハ調査區域内ニ於ケル第三紀層ノ最下部ニ位シ大堀村末ノ森附近ニ小區域ニ露出シ概シテ堅硬緻密ニシテ淡灰色ヲ呈シ豆狀構造 (Pisolithic Structure) ヲ示セルトコロアリ、硅質砂岩層ハ數箇處ニ小區域ニ現出シ稍厚層ヲ成スカ如キモ其層厚明カナラス、岩質ハ概シテ細粒ニシテ帶綠暗灰色ヲ呈シ主ニ石英粒ヨリ成リ少量ノ斜長石、角閃石及黑雲母ヲ含有ス、本層中ニハ徑三四寸乃至一尺四五寸ノ砂岩球ヲ埋藏スルノ外高瀬川ノ溪谷大堀村高倉及猿田ニ於テ見ルカ如ク厚サ三四寸乃至一尺内外ノ暗灰色ノ砂質頁岩ヲ挾有ス(第一圖及第二圖參照)、陶器業者ハ硅質砂岩ノ風化シテ稍柔軟トナレル部分ヲ「青ネバ」ト稱スルモ粘著力弱クシテ陶器ノ原料ニ適セスト云フ

花崗質砂岩層ハ本層中最モ廣域ヲ領シ其層厚六七十米アリ、岩質ハ一般ニ細粒乃至中粒ニシテ淡灰色乃至灰白色ヲ呈シ主ニ斜長石及石英

圖 四 第

屋懸ルケ於ニ方北鳥羽上村塚長



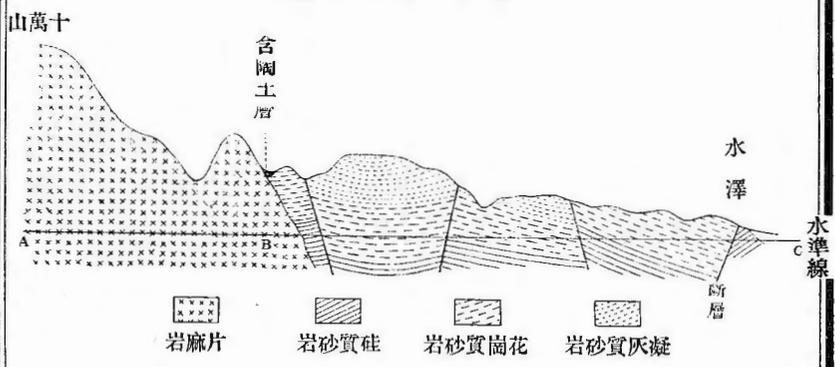
ヨリ成リ少量ノ黒雲母及角閃石ヲ含有スルモ長塚村上羽鳥附近及大野村下野上ノ北方ニ於テ見ルカ如ク殆ント粗粒ノ石英ノミヨリ成ル薄層ヲ縞狀ニ挾有スルトコロアリ(參照圖第四圖)此外本層中ニハ大堀村高倉、

猿田及小野田ニ於テ見ルカ如ク厚サ三四寸乃至一尺六七寸ノ砂質頁岩並ニ厚サ七八寸乃至三尺内外ノ疊岩ヲ挾有ス(第一、第二及第三圖參照)該疊岩礫ハ片麻岩、花崗岩及硬砂岩ニシテ其大サハ胡桃實大ナルヲ最モ普通トシ稀ニ拳大ニ達スルモノアリ、又本層中ニハ新山村石熊ノ北方ニ於テ見ルカ如ク局部ニ淡綠色ヲ呈スルトコロアリテ

綠泥石著シク多量ニ存在ス、陶器業者ハ該綠色部ノ風化セルモノヲ勿來ヲト稱シ陶器ノ釉藥ニ供ス、凝灰質砂岩層ハ主トシテ調査區域ノ中央部附近ニ露出シ其層厚ハ最モ厚キ所ニテ九十米内外ナルヘシ、岩質ハ細粒乃至粗粒ニシテ淡灰色乃至灰白色ヲ呈シ主ニ斜長石及石英ヨリ

第五圖 地質斷面圖

縮尺 水垂 七十一萬五千分之一



成リ豆狀構造ヲ示セルトコロアリ
 含陶土層ハ片麻岩ト第三紀層トノ境界
 面ニ沿ヒテ狹長ナル區域ヲ領ス、本層ハ
 片麻岩及花崗質砂岩ノ風化霉爛シテ沈
 積シタルモノニシテ花崗質砂及陶土ヨ
 リ成リ之ニ稍多量ノ亞炭片ヲ含有ス、陶
 器業者ハ該花崗質砂ヲ「ドウザリ」陶土ヲ
 「ネバツチ」又ハ單ニ「ネバ」ト稱シ之ヲ採取
 シテ陶器原料トナス、其生成時代ハ恐ラ
 ク第三紀ノ末葉ナリシナラン
 第三紀層ハ第五圖ニ示スカ如ク數多ノ
 斷層ニヨリテ斷タレ其分布區域ノ東端
 附近ニテハ東方或ハ西方ニ二十度内外
 ニ傾斜シ、中央部附近ニテハ傾斜緩ナル

向斜構造ヲ形成シ、西方片麻岩ニ接スル附近ニテハ西方十度内外ニ傾斜ス、而シテ本層中最上部ニ位スル凝灰質砂岩層ノ主トシテ域内ノ中央部附近ニ分布スルハ蓋シ既記ノ如キ地質構造ト該附近ノ地ノ稍高キトニ基因スルモノナルヘシ

洪積層ハ河成階段層ニシテ高瀬川、前田川及野上川ノ流域ニ布衍シ礫及砂ヨリ成リ其厚サ三四尺乃至十四五尺ナリ、礫ハ主ニ片麻岩及花崗岩ニシテ稀ニ硬砂岩及粘板岩アリ、其大サハ拳大乃至人頭大ナリトス、大堀村高倉ノ南方及西方、末ノ森附近並ニ大野村野上附近ニ分布スル洪積層ハ海拔六七十米乃至百十米内外ノ地ニアルモ其他ノ地ニ分布スルモノハ海拔三十米乃至五十米ニアリ、想フニ本地方ハ洪積紀中ニ地盤ノ隆起セシナラン、冲積層ハ河床附近又ハ溪間ノ低地ニ布衍シ砂礫及泥土ヨリ成ル

三 陶 土

(地質圖参照)

含陶土層ハ前田川及野上川ニヨリテ切斷セラル、ヲ以テ便宜上之ヲ

三區域ニ分テリ

第一區域 高瀬川、前田川間

第二區域 前田川、野上川間

第三區域 野上川以南

第一區域ハ從來ノ採掘地ニシテ陶土ハ含陶土層中ニ扁桃狀ヲナシテ賦存シ其長徑ハ略南北ニ走リ西方十度乃至二十度ニ傾斜セルモノ、如ク、從來ハ陶土ノ厚サ六七寸ニ達スルマテハ其走向及傾斜ニ沿ヒ坑内掘リニヨリテ之ヲ採掘シ其厚キトコロハ十數尺アリシト云フ、現時舊坑内悉ク廢類シテ陶土賦存ノ狀態明カナラサルモ其上部ニ該當スル山腹ニ陥没セルトコロ多ク往時稍盛ニ採掘セラレシヲ示セリ、茲ニ從來ノ採掘地ニ於ケル陶土ノ走向、延長及最厚部ノ厚サ並ニ傾斜ニ沿ヘル深サノ大略ヲ表記スレハ左ノ如シ

採掘地

名

走

向

延

長

最

厚

部

ノ

厚

サ

傾

斜

ニ

沿

ヘル

深

サ

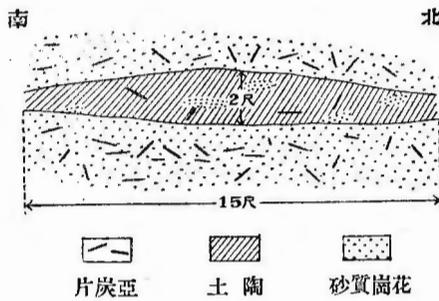
竹 <small>タケ</small>	花 <small>バナ</small>	六〇〇	二五	二五
縦 <small>モリ</small> 木 <small>キ</small> 曾 <small>ゾ</small> 根 <small>ネ</small>	二四〇	二〇	一二	
大澤	一八〇	三〇	二五	
陣屋澤	六〇〇	一五	二五	
美 <small>ウツクシ</small> 森 <small>モリ</small>	三〇〇	二五	二五	
澤山澤	一二〇	二〇	一五	
小 <small>コ</small> 星 <small>ボシ</small> 倉 <small>クラ</small>	三〇〇尺	一五尺	二〇尺	

現時陶土ハ樅木曾根ニ於テ採掘セラル、其坑道ハ花崗質砂岩中ニ略西方ニ向テ開坑シ樅木曾根ノ舊坑ノ下底ニアル陶土ヲ採掘スルモノニシテ坑口ヨリ約四百尺ニシテ陶土ニ會シ是ヨリ其走向即チ略南北ニ十五六尺採掘シタルニ南北兩方ニハ著シク縮迫セリ、陶土ハ其質良好ナリト稱スルモ其厚サハ二尺内外ニシテ其中ニ花崗質砂及亞炭片ヲ

含有ス(第六圖)

第二區域 大正六年ノ發見ニ係レリ、陶土ハ其質第一區域内ニ於ケル數箇處ノモノニ比スレハ稍劣ルト雖モ之ヲ地形、地質及地質構造上

圖六第 樺木曾根ノ探掘場ニ於ケル陶土胎狀態



ルニ前田川、野上川間ニ埋藏セラル、而シテ本區域内ニ於ケル所謂「ドウザ」來採掘セラルヘキ區域ナリトス、而シテ本區域内ニ於ケル所謂「ドウザ」

ヨリ觀ルニ同時代ニ生成セラレタルモノナルヘク其質ノ良否ハ恐ラク局部ノ變化ニヨルモノナラン、而シテ上野上ノ北東方ニ發見セラレタル陶土ハ開掘未タ充分ナラサルヲ以テ其厚サ明カナラス、其北方三四町ノ處ニ少シク開掘セラレタル跡アルモ現時ハ表土ニ被覆セラル、是ヨリ北方ニハ開掘セラレタル所ナキモ含陶土層ハ中ノ澤及其他ノ諸溪流ノ溪谷ニ露ハル、是等ノ事實ニヨリテ推ス

リ」ハ第一區域ニ於ケルモノニ比シ一般ニ粘土ヲ多量ニ含有シ遙ニ粘著力強シ

第三區域 含陶土層ハ第二區域ノモノニ連續スルモノニシテ上野上ノ部落ノ南方ニ露ハレ未タ開掘セラレタルコトナシ

四 結 章

既記ノ事項ヲ綜合スレハ左ノ如シ

(一) 高瀬川、前田川間ニ埋藏セラレタル陶土ハ既ニ殆ント採掘シ盡サレ
メ
リ

(二) 現時採掘中ノ樅木曾根ノ陶土ハ其量尠少ナリトス

(三) 前田川、野上川間ニ埋藏セラル、陶土ハ其量多大ナリトス

(四) 第三區域ハ調査ノ目的ニアラサリシヲ以テ深ク踏査セス、其南方ニハ含陶土層連結スルカ如シ

大野村上野上附近ニハ斯ノ如ク多量ノ陶土アリト雖モ互ニ亂掘ヲ戒メ原料ノ保存ニ努メ利用ノ途ヲ怠ルヘカラサルナリ、而シテ現時ハ大

堀村トノ間ニハ坂路多ク車馬ヲ通セスシテ運搬頗ル困難ナリ、現時陶器製造ニ従事スルモノハ皆大堀村ニ居住シ半ハ農業ニ従事ス、故ニ彼等ヲ大野村ニ移住セシムルコトハ現時ノ状態ニテハ甚タ困難ナルヘシ、隨テ現時ノ相馬焼ヲシテ永續セシメンニハ大堀、上野上間ニ容易ニ車馬ヲ輓用シ得ヘキ道路ヲ開鑿スルノ要アリ、而シテ是等二地點間ニ布疋スル第三紀層ノ岩石ハ比較的柔軟ニシテ道路ノ開鑿ハ困難ナラサルヘシ

大正七年十月七日印刷
大正七年十月十日發行

著作權所有

農 商 務 省

印刷者 吾妻菊三郎
東京市神田區通新石町三番地

印刷所 東陽堂
東京市神田區通新石町三番地
合資社

發賣所 東陽堂
東京市神田區通新石町三番地
合資社

電話本局九二九番
振替口座東京二三四三六番